～ 藩校教育の理念を今に ～

第12回
全国藩校サミット®行田大会

平成26年 7月5日(土)

主催／ 第12回全国藩校サミット行田大会実行委員会
一般社団法人 漢字文化振興協会

さきたま古墳群

祝　第12回全国藩校サミット行田大会

埼　玉　県

古代蓮の里

祝　第12回全国藩校サミット行田大会

行　田　市

ご挨拶

漢字文化振興協会会長
石川 忠久

この度、第十二回全国藩校サミットが、忍藩縁りの地、行田にて開催される運びとなりましたことは、まことに喜びに堪えません。当初、行田サミットはこれより前に予定されておりましたが、諸般の事情から本年開催となりました。折しも一昨秋、映画「のぼうの城」が全国に上映され、当地の歴史を紹介し、今年のサミット開催には好き前触れとなったことでした。当地は、江戸の北の要衝の位置を占め、譜代十万石の封地として栄えました。藩校進脩館は幾多の人材を輩出し、教育・文化の中心であり、その伝統は今も脈々と受け継がれています。「進脩館」の名は、県立高校に冠せられ、地域の活動は郷友会の唱導のもと、揺るぎなく行われています。

かつて、私は当地を訪れ、その伝統を継ぐ活動の様子を拝見し、次のような詩を詠いました。

忍城偶成　　忍城偶成（おしじょうぐうせい）

三百諸侯競美風　三百諸侯 美風を競（きそ）う
進脩名古武州中　進脩の名古し 武州の中
児童斉唱先賢句　児童斉唱す 先賢の句
可看郷黌化育功　看るべし 郷黌（きょうこう）化育の功

まことに蕪詩ですが、思わず口を衝いて出た私の眞情であります。当地では、今もこの詩を詠ってくださっているとのこと、嬉しい極みです。

思うに、終戦後、伝統文化の軽視、古典教育の等閑視による昏迷の時期が長く続きましたが、昨今、小学校児童に漢文を学ばせ、また「古典の日」を制定するなどの施策も見られ、ようやく曙光が射して来たように思われます。この機を逸せず有効な方策を考えねばなりません。

当協会では、その一助として「漢文検定（論語・漢詩）試験」を創め、今年で三年目になります。皆さまのご協力を得て発展を期したいと思います。

最後になりましたが、埼玉県の上田清司知事、行田市の工藤正司市長を始め行政当局の方々の行き届いたご配慮と、藩主後裔松平忠昌氏、郷友会の皆さん、関係の方々その献身的なお力添えに感謝し、このサミットの成功を祈念してご挨拶と致します。

ご挨拶

第12回全国藩校サミット行田大会
実行委員会実行委員長
松平 忠昌

この度は、行田市で開催される第十二回全国藩校サミット行田大会のご案内を差し上げました処、全国各地から、旧藩主ご当主の皆様方及び藩校関係者をはじめ、大勢の有志の方々にご多用の中にもかかわらず、また遠路の処をご参集賜りまして誠に有難うございます。

歴史と伝統のある全国藩校サミット大会を行田の地で、かくも盛大に開催できますことを、地元実行委員会を代表しまして、厚く御礼申し上げます。

全国の各藩に開設されました「藩校」は、１７９０年に発布されました「寛政異学の禁」を切っ掛けに各地に設立され、「修身、斉家、治国、平天下の道」を教えることを目的とし、儒教の教えである「五常」と「五倫」の徳目を軸とした「人の道」の教育により、「武家社会」における「英才教育」が行なわれていましたことは皆様もご高承のことと存じます。

一方、漢字文化振興協会の「全国藩校サミット開催趣旨」にも明記されていますが、江戸時代の教育の質の高さと普及状況の豊かさは、当時の諸外国と比較しても目を見張るほど素晴らしく、その学問を学ぶことによって今の教育に活かせるものがある筈との想いも共有して頂けるものと考えます。

我々の使命とも云うべきことは、昔を学び、古典に親しみ、リーダーを育んだ藩校教育を活かすために、志を同じくする者が、その善い点を次世代に繋ぐことにあると思います。そのために、今迄の大会の活動に加えて藩校関係者による「研修会」を企画させて頂き、次の大会に向けた連帯感のある活動を目指したいとご提案致しました。このような出逢いと思い遣りを大切にして皆様と共に展開させて頂ければ幸いに存じます。

改めまして、ようこそ行田にお見え頂きました。重ねて御礼申し上げ、ご挨拶とさせて頂きます。

■大会プログラム■

7月5日　大　会

12時30分　**第1部　諸会議**

当主会議・藩校会議　会場／ベルヴィ アイトピア

研修会（講演会）　会場／行田市産業文化会館

テーマ「国語教育の柱―漢字・古典・短文作り」

立命館大学シニアフェロー・大阪大学名誉教授　**加地伸行**氏

14時00分　**第2部　藩校サミット**　会場／行田市産業文化会館

国歌斉唱

開会の辞　漢字文化振興協会会長　**石川忠久**

主催者挨拶　大会実行委員会委員長　**松平忠昌**

〃

大会役員紹介

歓迎の挨拶　埼玉県知事　**上田清司**

〃　行田市長　**工藤正司**

基調報告　当主会議議長　**松平忠昌**

〃　藩校会議議長　**大野年司**

各藩紹介　各藩代表ご登壇

登壇藩代表ご挨拶　徳川宗家第18代当主　**徳川恒孝**

行田市の紹介（映像）

――――休　憩――――

15時40分　記念講演　テーマ「江戸後期の忍藩と明治への移行」　講談師　神田紅氏

素読大教室　忍藩進脩塾生徒・行田市立埼玉小学校児童

次期大会開催地報告　漢字文化振興協会事務局長　白石宗靖

次期大会開催地代表挨拶

引継書受渡（松平実行委員長から次期大会開催地代表へ）

閉会の辞

18時00分　**第3部　交流会**　会場／ベルヴィ アイトピア

大会役員挨拶

顧問挨拶　埼玉県議会議員　鈴木聖二

乾杯　衆議院議員　野中厚

ご歓談　行田商工会議所会頭　小川雅以

7月6日　エクスカーション

半日コース（古代蓮の里・さきたま古墳群・行田市郷土博物館）

一日コース（古代蓮の里・さきたま古墳群・行田市郷土博物館・足袋とくらしの博物館・妻沼聖天院）

（敬称略）

目次

主催者挨拶 …… 2

第12回全国藩校サミット行田大会プログラム …… 4

歓迎挨拶 …… 8

全国藩校サミット 開催の記録 …… 11

特別寄稿 …… 12

行田の歴史・観光案内 …… 27

参加御当主紹介 32
藩校概要［参加藩校紹介］ 38
参加藩校一覧 62
実行委員会委員一覧 63
協賛団体・協賛者一覧 64
協賛広告

ご挨拶

埼玉県知事

上田 清司

第十二回全国藩校サミット行田大会が、旧藩の御当主をはじめ多くの皆様の御参加の下、盛大に開催されますことをお喜び申し上げます。全国から本県にお越しの皆様には心より歓迎いたします。

さて、子供を鍛え、次代を担う人材を育成する教育の重要性が改めて認識されている中、藩校教育の伝統や精神を伝える本大会が埼玉県で開催されますことは、大変意義深いことであります。

江戸時代の埼玉県のエリアには、小江戸川越の川越藩、人形のまち岩槻の岩槻藩、そして映画「のぼうの城」の忍城で有名な忍藩の三藩がありました。ここ忍藩においては、江戸末期に藩主松平忠堯侯が忍城内に「進脩館」を設立しました。この藩校教育を受けた先人は、幕末から明治維新の忍藩を支え、明治以降も、日本の金融界の基礎を築いた実業家の小山健三をはじめ各界の優れた人材を輩出しました。

廃藩置県後も、旧忍藩の関係者により発足された忍郷友会が「進脩館」の伝統や精神を引き継ぎ、今日まで百年以上にもわたり、後継者の育成と郷土の文化発展に寄与されています。

全国の藩校においても、藩政を担う優秀な人材を育てるため、それぞれ特色ある藩校教育が行われました。日本の教育に藩校が果たした歴史的役割は大変大きいものがありました。

本大会のスローガン「～藩校教育の理念を今に～」のとおり、藩校教育の古き良き伝統・文化が再認識され、次世代の子供たちにしっかり引き継がれていくことを願っております。

開催地の行田市は埼玉県の県名発祥の地です。国宝「金錯銘鉄剣（きんさくめいてっけん）」を出土した稲荷山古墳をはじめとする九基の大型古墳が現存し、世界遺産に匹敵するほど歴史的価値の高い「埼玉古墳群（さきたま）」はまさに圧巻です。また「古代蓮の里」では、神秘的な美しさを持つ古代蓮がちょうど見頃を迎えています。

全国からお越しの皆様には、お時間の許す限り行田の歴史と文化を楽しんでいただき、交流を深めていただければ幸いです。

結びに、全国藩校サミットの今後ますますの発展と参加された皆様方の御健勝と御活躍を心から祈念申し上げ、私の挨拶とします。

ご挨拶

行田市長

工藤 正司

全国藩校サミットが、ここ行田の地で盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げますとともに、旧藩御当主の皆様をはじめ、多くの藩校関係者の方々のご来臨を、行田市民を代表して心から歓迎申し上げます。

「埼玉県名発祥の地」行田市は、北に利根川、南に荒川の二大河川が流れる〝水と緑に恵まれたまち〟で、国宝「金錯銘鉄剣」が出土した東日本随一の規模を誇るさきたま古墳群に象徴されるように古くから文明が栄え、今も市内には、「古代」「中世」「近代」と行田の伝統と文化を彩る時代ごとの特色あふれる歴史が息づいております。

江戸時代には、要衝の地として親藩・譜代の大名が藩主を勤め、北関東の政治・経済・産業の中心であった忍藩の文化と繁栄が今の行田の礎となっております。

特に、第十四代藩主松平忠堯候により設立された藩校「進脩館」の藩士育英は、藩政振興はもとより、その後の明治維新体制の充実にも寄与したところであります。そして、この人材育成をまちづくりに活かす藩学の精神は、本市の風土に強く根付き、今日の行田の教育にもしっかりと受け継がれております。

歴史的な転換期を迎える現代にあっては、人材こそが我が国再生の原動力です。

本市におきましても、時代の要請や社会の変化を的確に捉えた教育に力を注ぎ、未来を拓く人材と文化を育むまちづくりを推進しております。なかでも、旧忍藩の関係者により発足した公益財団法人忍郷友会の皆様には、市内小学生を対象に素読教室を開催するなど、日本文化の源泉ともいえる漢字文化の継承にお力添えをいただき、今を強く生きる、そして未来を担う子ども達の育成に市を挙げて取組んでおります。

このたびのサミット開催により、それぞれの地域の歴史と文化を見つめ直すとともに、藩校の優れた人材教育・実務教育を振り返り、新たな時代を切り拓く人づくり・まちづくりに生かされていくことを心から期待しております。

さて、本市は、一昨年に公開された映画「のぼうの城」の舞台として全国の皆様に広く知られておりますが、市内にはその歴史のゆかりとなる「忍城址」や「石田堤」をはじめ、「足袋のまち」として全国に名を馳せた足袋蔵が点在する街並みなど、魅力あふれる地域資源の宝庫であります。さらには、これから夏にかけて42種類12万株もの花蓮が咲き誇る「古代蓮の里」は大きな見どころとなりますので、是非ともこの機会に古代ロマンと歴史が息づくまち行田をゆっくりとお楽しみいただければ幸いに存じます。

結びに、本サミットの開催にあたりご尽力いただきました関係各位に深く感謝を申し上げますとともに、全国藩校サミットのご盛会と、ご臨席の皆様の今後益々のご健勝とご活躍を心から祈念いたします。

第12回藩校サミット行田大会メッセージ

埼玉新聞社 代表取締役社長
小川 秀樹

全国藩校サミット行田大会の盛大な開催を心よりお祝い申し上げます。

忍藩の藩校「進脩館」は、校歌が行田市立南小学校へ、扁額は行田市立中央小学校に分かれ、今も行田の子どもたちの中で生き続けています。私の母方の祖父、春田昇太郎が南小学校の校長を務めていたこともあり、「進脩館」の名がサミットを通じ、全国に発信されることを誇らしく感じています。

忍松平家と関わりある皆さんの集まり「忍郷友会」の新年会では、行田市内で選ばれた子どもたちが、日ごろの経験を通じ感じた思いを発表する場があります。毎年、優しくもたくましい子どもたちの主張に、涙腺が緩みます。自らの経験を文字にし、語るという学び方の基本がしっかりできてこその主張です。子どもたちの立ち姿からは、学ぶ楽しさを知るが故の自信がにじんでいるようにも見えます。

科学技術の進歩により、子どもたちの学習環境は大きく変化しておりますが、年長者が年少者に語り聞かせ、まずは覚えることから始める藩校の教育方法は、技術の進化が著しい現代においても輝き続けています。デジタル技術の進展で、文字に対する姿勢が変化しておりますが、まずは声に出し、手で、体で覚えるというプロセスにこそ、新たな技術革新の芽があると考えます。「Ｂａｃｋ ｔｏ ｂａｓｉｃ」。藩校教育の理念、教育方法の研究の中に、日本の教育の未来があると信じております。

行田市には、古代ロマンを語る埼玉古墳群があり、サケが遡上する大河、利根川が流れる関東平野の雄大な景観があります。「進脩館」で学んだ人材は、足袋を中心とした被服産業を行田の町に根付かせ、一時期大変な活況を呈します。その後も優れた経済感覚のＤＮＡは現代まで引き継がれ、行田市は最先端技術を要する大きな工場がいくつも立地する産業拠点としての顔もあります。

豊かな歴史と自然の恵みの中で行田の子どもたちは育っています。地域を愛し、日本を愛し、地球を愛する子どもたちを育てていくのは地域の大人の責任です。私ども埼玉新聞社も、「進脩館」の教育理念を未来に活かし、笑顔あふれる地域づくりのお手伝いを続けてまいりたいと思います。

全国藩校サミット 開催の記録

全国藩校サミットは、平成十四年に東京都の湯島聖堂で開催されたのが始まりです。経済界、教育界の有志が中心になって設立された「漢字文化振興会（現漢字文化振興協会）」が呼びかけて実現しました。戦後の日本では、漢字文化が衰微する一方で、外国語の乱用、日本語の乱れなどが広範にみられます。この日本語の状況を憂え、漢字文化を後代にきちんと伝え、受け継いでいくことが、藩校サミットの基本理念です。

江戸時代、藩校は全国の二百六十余の藩に次々に設立されました。その教育は、各藩それぞれに特色があり、その地方の青少年教育および文化の振興に大きく寄与してきました。それぞれの地域に息づいている藩校の伝統や精神を、現代の視点で見直して評価し、生かすべきは生かしていこうという趣旨で、毎年全国の藩校所在地回り持ちで開催し、行田大会で十二回を重ねました。

第一回	平成十四年	（二〇〇二年）	江戸幕府昌平坂学問所（湯島聖堂）＝東京都文京区＝
第二回	平成十五年	（二〇〇三年）	会津藩・日新館＝福島県会津若松市＝
第三回	平成十六年	（二〇〇四年）	佐賀藩多久邑・東原庠舎＝佐賀県多久市＝
第四回	平成十七年	（二〇〇五年）	備中松山藩・有終館＝岡山県高梁市＝
第五回	平成十八年	（二〇〇六年）	高遠藩・進徳館＝長野県伊那市＝
第六回	平成十九年	（二〇〇七年）	庄内藩・致道館＝山形県鶴岡市＝
第七回	平成二十年	（二〇〇八年）	熊本藩・時習館＝熊本県熊本市＝
第八回	平成二十一年	（二〇〇九年）	長岡藩・崇徳館＝新潟県長岡市＝
第九回	平成二十二年	（二〇一〇年）	松江藩・文明館＝島根県松江市＝
第十回	平成二十四年	（二〇一二年）	水戸藩・弘道館＝茨城県水戸市＝
第十一回	平成二十五年	（二〇一三年）	薩摩藩・造士館＝鹿児島県鹿児島市＝
第十二回	平成二十六年	（二〇一四年）	忍藩・進脩館＝埼玉県行田市＝

江戸時代の教育

徳川宗家第18代当主　徳川 恒孝

長い戦国時代が終って新しい江戸時代が始まり、平和の時代が安定化すると共に日本の総人口は急速に増加しました。現代のような正確な人口調査が行われるのは八代将軍吉宗公の時代になりますが、色々なデータによりますと、江戸幕府初期の日本総人口は約千二百万人程度、それが百年後の元禄時代には約三千万人に増加したところで頭打ちとなり、しばらくその水準で推移したあと幕末にむかって再び緩やかに増加していったと見られています。今日のような色々な予防接種などはありませんし、気候の変化によって厳しい寒冷化が進んだり、干ばつや洪水・地震も繰り返し起こりましたから、栄誉バランスも悪かった幼児、小児の死亡率は大変に高く、両親の祈るような気持ちのもとに無事に育ってゆく子供達は、士農工商の如何を問わず社会全体の宝として大切に育てられました。

勇猛果敢で主君とともに命を掛けて戦うことを旨とした戦国の武士たちも、三代家光公までの幕府創世記を過ぎ、幼少の四代家綱公（11歳で将軍宣下。保科正之公が補佐）の新しい時代に入るとともに、有能な官僚として夫々の国を豊かに治める能力が強く求められるようになります。彼等は、武家の精神と高い人格を守りながら、深い学識と統治能力、経済の働きと力を理解する能力を持つことが必須の要件となり、各藩の財政を健全に保つために、農・工・商と力を合わせて新しい平和な時代を乗り切って行く事になります。世界に類を見ない２５０年の平和を支えたのは、安定した平和と共に徐々に生まれてきた高度な経済社会であり、それを支えたのは士農工商の枠を超えた高い教育水準と学問の深化によって育まれた社会全体の高い道徳水準であったと思います。

最初の藩校が設立されたのは寛文９年（１６６９年）、岡山藩主池田光政公の設立された岡山学校と言われています。１６００年代には、その他に会津藩の稽古堂、前橋藩の好古堂などが設立されたと記録が有りますが、どの程度本格的な「学校」であったかは解りません。全国的に藩校が設立されるようになったのは宝暦年間（１７５０年代）以降のことのようです。江戸幕府の学校は湯島聖堂（昌平坂学問所）ですが、その起源は元禄３年（１６９０）に上野忍岡に林羅山が設立した私塾で、綱吉公の時代に湯島聖堂に移転、講堂・学寮等が出来ました。さらに「寛政異学の変」によって学問所は林家の私塾から正式な幕府学問所となりましたから、各藩でも同じような私塾が早くから存在し、それが寛政年間（18世紀末）の頃から藩の直接経営する学問所に発展していったものと思われます。当初は論語素読から始まる道徳と知識を深めるための学問が「学び」の中心でしたが、徐々に藩校の規模が拡大するにつれて、剣術、水連、体育、そして鉄砲の扱い、洋学にまで教科は増えて行きます。いずれも武士にとっては必須の科目でした。また藩内の地位・石高の高いもの、家を継ぐ長男にはより高い目標が設定されていました。

国民の大半を占める農・工・商の教育は江戸時代の極めて早い時期から全国的に進みます。都市では「手習いの御師匠さん」が、地方ではお寺の御坊さんたちが教育に当たりました。武士階級の理念と精神の学問とは異なり、其々の生活に密着した実学教育です。「いろは」を終えますと、魚屋さんの子供は魚の名前を、八百屋さんはあらゆる野菜の名前を、大工の子供達は材

木の産地や木材の名称を習います。街道の宿場の暗記や、河の名前。港や町々の場所。全員に必須の算盤の扱い。それらに加えて道徳の科目が巧みに入って行きます。「盗んではいけない」「苛めてはいけない」「嘘をついてはいけない」「困っている人は助ける」と言うような教育が行われたのは藩校と同じです。現在のような「クラス全員が同じ教科書を声を揃えて読む」ような集団教育ではありません。一人一人の能力と将来の進路によって個別な教育が行われました。（当時教科書は2～3千種類あったと云われています。）

女の子には更に裁縫やいろいろ芸事の手習いが待っていましたから、都会の子供達はあまり今日と変わらないタイトなスケジュールで塾通いをしていたことになります。男の子たちは大体現在の小学校を卒業する年代で丁稚奉公に入り、20歳になる頃には立派な一人前の商人・職人となって、1年のお礼奉公のあと、自分の進む道へと巣立って行きました。

農村や山村の男の子達はお寺での「手習い」に加えて、若者達の団体として、村全体の保林や水路の確保。困窮している農家の援助などに活躍します。女の子は「手習い」の後に、町での奉公に出ることが多かったようです。

江戸時代の行政の特徴は、藩運営の基礎となる産物（大きな部分は「米」ですが、それ以外の「土地の名物」開発も極めて重要でした。）を実際に取り扱う人々が武士以外の農工商の人々であり、武士階級と人口の大多数を占める農・工・商の人々の融和・協調が必須であることでした。「豊かな藩」を築くことは藩全体の共同作業であり、多くの藩は藩全体の教育にも力を注いでいますし、優秀な人材は武士の「格」に引き上げて高い教育を受けさせるなどの手法も取られています。この辺が西欧の強固な身分制度と大きく違うところだと思います。（欧州の「領地」は全て貴族か教会の「私有地」であり、領主は自分の領地の万能の神に近い絶対権力者でした。因みに江戸末期の日本全体の識字率は世界最高のものだったと云われています。）

江戸時代に各藩が設立し、其々の武士達をまず立派な人格者であり、逞しい武士であること、また後に藩運営の為には経済にも精通した人間に育てることを目的とした藩校の教育が、今日の日本の教育にどの程度の影響を与えているのかは良く解りません。しかしまず「人間として高い道徳性を子供の時から厳しく教える」と言うもっとも大切な、基本の基本とも言うべき重要なポイントが徐々に失われつつあるのではないか、という漠然とした感触があります。そうだとすれば、それは本当に困ったこと、国家最大の問題と思いますが、小生の間違いであって欲しいと切に願っています。

最後になりましたが私の大好きな会津日新館の「什の教え」を書いて、この稿を終えます。

年長者の言ふことに背いてはなりませぬ
年長者にはお辞儀をしなければなりませぬ
虚言(うそ)を言ふことはなりませぬ
卑怯な振舞いをしてはなりませぬ
弱い者を苛めてはなりませぬ
戸外で物を食べてはなりませぬ
戸外で婦人(おんな)と言葉を交わしてはなりませぬ
ならぬことはならぬものです

忍藩の藩校について―今、求められるものは

公益財団法人 忍郷友会 会長
松平 忠昌

忍藩の藩校「進脩館」

忍藩の藩校は、「進脩館」として文政6年（1823年）、「領地三方処替え」により桑名の地から行田に移設されました。藩校名は、易経「乾」の「卦」の文言にある「君子進徳修業、欲及時也」（君子は徳に進み業を脩め、時に及ばん事を欲する也）に由来し、桑名時代の藩儒平井澹所の名付けとされています。

時の藩主は松平家第九代「忠堯（ただたか）」であり、祖父「忠翼（ただすけ）」が、1813年、桑名に創設した藩校の再建に腐心しましたが、財政難もあって移封後12年の月日を要しました。

天保7年（1835年）に城下下荒井の東照宮の東に完成した「進脩館」には、「芳川波山」が藩儒（学頭）になりました。芳川波山は、昌平黌祭酒大学頭林述斎の推薦を受けて藩儒となり、忍藩の士籍に入ることが許された人で、教学の本旨は「朱子学」でありました。

公益財団法人忍郷友会では、芳川波山の偉業を顕彰するために早稲田大学村山吉廣名誉教授にお願いして「芳川波山の生涯と詩業」という書籍を発行しています。

平成10年に行田市内の高等学校が統合された折に藩校名を冠して、「埼玉県立行田進脩館高等学校」（現在は「埼玉県立進脩館高等学校」）が設立されていることもありがたいことです。

藩校進脩館では、「修身、斉国、治国、平天下の道」を教え、「人の道」の教育により、その折の指導者（リーダー）を育てる「英才教育」を実施しており、明治維新後は埼玉県内の教育界に進出する人材を輩出していたようで、「埼玉師範学校」では「忍師範」と云われたようです。

古典や歴史を学び、「何をするべきか」を選択できるリーダーを育て、様々な事態に対処し、立ち向かうことの出来る人が、今渇望されていると思います。

藩校の教育は、その折の「リーダー」を育てる「エリート教育」とも云えることから、今の社会にも「心の教育」が必要と考える次第です。忍郷友会は、自らが出来る範囲のことを実施したいと思っており、一燈照隅の思いではありますが、20年後の未来の日本を背負う世代（小学生を中心）に素読教室を開講したり、行田市民を対象とする「古典の講座（四書を中心）」を開講しています。この様な不断の努力は、今後共継続して進めて参りたいと考えています。

藩校の教育から、以下のようなことに思いを致しています。

「違いが判る」―「出逢いと思い遣り」

人は全て「違う」ということが、人間関係の原点にあります。違いは、居住する場所や生活環境（国、社会、家庭、人種、言語、風土、文化、等）から発生しています。

これらを理解した上での関係構築は、国内外を問わず対外活動においての不可欠な要素と思っていますし、私の多年に亘る海外生活の経験でも、この様な考え方が大いに役に立ちました。

出逢いと思い遣りは、「距離」と置き換えることができると考えます。自らを中心とした同心円があって、そこから出逢いが生じるという訳です。

生まれて初めての出逢いは、恐らくほとんどの方が「両親」であり「家族」でしょう。肉親の外側に「社会」

があって、「友達」、「先生」、「会社」、「国」、「世界」が広がって行きます。

出逢うことが起点となり、思い遣りが始まります。出逢いの関係が近いほど思い遣りも深まる訳です。思い遣りには、「時間」と「余裕」を作ることも重要であると思っています。

留意点は、「自主的」か「受動的」かです。「何のために生まれたか」ではなく、「何をして生きるか」に思いを馳せ、そのために出逢いを楽しみ、思い遣りを学んで行きたいものです。

人として「してはいけないこと」を学ぶこと、教えることも重要であり、少なくとも自らの出逢いの範囲で可能な限りのことを実践したいものです。「躾け」、「心掛け」なども忘れてはならない事柄と考えます。

「正しい歴史（日本史と世界史）を学び、日本人としての誇りを持つ」

私たち日本人の祖先は、勤勉、正直、謙虚、素直、感謝といった徳目を大事にして、時代を過ごしてきた人々です。美しい郷土と郷土愛、人の道の教えを中心とした豊かな営みを続けていたので、２６０年余の時代が続いた訳であり、日本人が育んできた美質によるものと云えます。

この様な教育や誇るべき日本人の美質は取り戻したいものです。そのための教育は重要です。藩校や寺子屋で行われた教育が日本を救った実例を紹介させて頂きます。

１９４５年に実施されたＧＨＱの「識字率テスト」の結果は驚嘆に値するものであり、そのお蔭もあって、第二次世界大戦後の日本は、「ローマ字化」を免れることができたと聞いています。15歳から60歳の不特定な人々「１７，０００人」に対して行われたテストにおいて、問題が読めなかった人は「３％」、正解ができなかった人は「27％」ということで、当時の欧米では考えられない高水準の識字率であったので、「ローマ字化」の法令は「廃案」になったのです。

世界大戦後の占領政策「戦争罪悪感の植え付け」も違った意味で見直しが必要と思います。

江藤淳氏の著書「失われた言語空間」に待つまでもなく、戦後処理において失ったものがあるとみています。

決して戦争に賛成するものではありませんが、日本人の精神、美徳や恥を知る豊かな心情は取り戻さなければならないと思う次第です。そのためにも「正しい歴史教育」を行い、「心の教育」や「藩校教育」の精神を伝え、実践を通じてその基本を活かすことが望まれるものと考えます。

具体策に関しては、藩校関係者が連携して意見交換・協議を行い、英知を集めて実施可能なことを見付けて行けば宜しいと考えております。皆様のご忌憚のないご意見・お考えをお寄せ下さい。継続的な活動ができるようになることを期待しております。

皆様へ

今の世の中は、デジタル機器類のお蔭で大変便利になっていますが、人々はデジタルに追われたり、使われてはいないでしょうか。デジタルは道具、デジタルは情報。道具や情報を使うのは、人であり、アナログ思考であります。道具や情報だけでは、何も産み出してくれないと理解すべきと思う次第です。

自主性のある思考で、何をすべきかを選択し、時間を作り出して努力すれば良いと考えます。

どの様な人にも「初めて」がありますので、何事にも挑戦を「始めて」、地域社会に貢献することに努めたいものであります。始めるのに遅過ぎることはないと信じています。

皆様との今回の「出逢い」は、明日以後の「思い遣り」に繋がります。

本稿の結びに、好きな言葉を「四つ」以下の通りご案内申し上げます。

一つ目は「志」。志を高く持つこと。自分をそして家庭を、地域を、国を高めること。

二番目が「愛」。愛は自ら作るもの。愛は活力の源。

三番目が「学び」。昔に学ぶ、今に学ぶ、本に学ぶ、他人に学ぶ。積極的に学びの場を作ること。

そして最後が「感謝」です。感謝の気持ちが有れば、幸せになれます。

ようこそ行田にいらして下さいました。そして、ご一緒して頂きまして、誠にありがとうございました。

これからも、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

進脩館から羽ばたいた人材

忍郷友会会員・埼玉県教育委員会 生涯学習文化財課 主幹　若松 良一

はじめに

忍藩の藩校進脩館や培根堂で学問を修めた人々から、幕末の難局を切り開き新時代への舵取りに功績のあった人物や近代社会において政治、経済、教育、文化をはじめとする各分野で活躍する人材が輩出された。その中から抜群の人物五人を取り上げ、紹介する。

一　忍城下を戦火から守った男　岸嘉右衛門

本姓は加藤氏で家禄は二百五十石。幼少から頴悟で、藩校の中原清蔵、藤井領平に師事した。十八歳で物頭、二十二歳で御小姓頭となり、次いで参政となった。慶応四年正月、鳥羽伏見の戦いに敗れて、忠誠公が紀伊に逃れた際には、八方斡旋に努め、賞詞を受けた。討幕の官軍が下ると、藩論は勤王の忠国公派と佐幕の忠誠公派とに割れたが、嘉右衛門は数々建議し、両公に説いて勤王へ統一する事に成功した。慶応四年三月幕府脱走兵が城下に押しかけた節には、官軍が幕府脱走兵を匿う忍藩の態度を疑って、攻撃あるのみと激昂したため、嘉右衛門は久河道伯に諭させて脱走兵を還させた。三月十一日官軍が城下に至ると、参謀楢崎頼三らを忠誠公の病床に導き、談判が成立するや、誓書を提出し、軍糧三千俵を輸し、兵二小隊を板橋駅に出す事を約した。奥羽戦争平定後、軍事総裁、次いで忍藩権大参事に任命された。のちに楢崎の推挙によって集議院公議人（貢士）となり、楢崎のほか、桂太郎とも深く交わった。明治三年七月十八日、下谷三味線堀藩邸において病に罹り没す。享年三十六歳。駒込千駄木町専念寺に葬る。

二　埼玉県の教育近代化に尽力　川島 浩

埼玉郡須賀村の豪農の子として天保七年七月二十日に生まれる。始め忍藩儒芳川波山に就き、さらに、藤森弘庵に詩文経学を、大沼枕山に漢詩を学んで楳坪と号した。明治の初め、蚕種製造に志して改良と工夫を重ね、生糸の海外輸出が起ると、製品改善のため蚕種製造業者の組織化を図り、推されて大総代となった。これが県令白根多助に認められるところとなり、明治八年三月埼玉県第十四区区長、六月埼玉県立学校監事に補された。九月、埼玉県学務課専務となり、累進して十二年十月第二代埼玉県学務課長に就任した。在職中、「修身叢語」を編纂し、道徳の昂揚に務め、教科書を著し、埼玉県の教育近代化に貢献した。明治十九年八月、選ばれて北・中葛飾郡長に任用されて活躍したが、二十二年冬、病のため帰郷し、盲目の母に孝養を尽くした。晩年は胃癌を病み、二十四年五月二十五日、五十七歳で歿した。

三　下級武士から異数の栄達　久保村活三

天保十四年三月二十五日下級藩士の子として勢州大矢知陣屋に生れた。家禄は四石二人扶持であった。のち、忍に戻り、房州北條の陣屋、秩父の陣屋に移った。慶応四年二月に起った清雲寺事件において、組窪村治三郎が少々手疵を負い引き返したと「割役御用日記」に記されているが、これは久保村活三のことであろう。明治維新の際、官軍に従って白河に出陣し、さらに山田志馬に随って江戸警備に任じた。明治三年六月、抜擢されて忍藩権少属と

なり、四年十二月、埼玉県官に転じ、聴訟課勤務を命じられた。五年八月、司法省十四等出仕埼玉裁判所出勤となり、十三年八月判事に進む。十五年五月、埼玉県警部に転じ、同年八月、福岡県警部長（奏任官八等相当）に栄転した。その後、鳥取、鹿児島、新潟の警部長を歴任して、二十七年には島根県書記官内務部長に昇任した。在職中、知事武井守正に最も信任されたことが縁で、株式会社鳥羽造船所の社長となった。四十四年三月二十一日没。年六十九。鳥羽の常安寺に葬った。貧苦の中に育ったため、他人への同情心が厚く、福岡県警部長の時には、部落開放に尽力した。

四　進脩館の神童から名物町長へ

古市直之進

嘉永五年十月二十一日忍藩士八百太郎の子として矢場に生れた。家禄は百石。幼くして進脩館の神童と言われ、助教を経て、慶応四年六月漢学三等教授に任ぜられた。廃藩後は荒井学校の指導的地位にあったが、六年五月に幸手学校三等教授に転任し、さらに熊谷県の暢発学校九等教授、群馬県師範学校準四等教師となる。十五年二月北埼玉郡補欠選挙で第二回埼玉県会議員となり、一期を務めた。所属は自由党で、全議員三十九名中唯一の士族であった。十六年埼玉県の自由党員が東京から植木枝盛などの弁士を招いて政談演説会を開いた際、佐間の清善寺において演説を行った。

十八年五月、当時教育の行き届いていなかった島根県隠岐島へ小学教員講習所教師として赴任した。二十四年三月、忍町長に就任し、三十三年四月まで勤続した。忍は士農工商が一団となって居住しており、利害対立があって統治が困難であったが、公平無私の態度で万般を処理し、難局を切り開いた。退職後、忍馬車鉄道の社長を経て、三十六年から静岡県小笠郡佐倉村臨時村長、四十四年九月から掛川町有給町長を勤めた。大正二年十月忍町に帰ると、再び忍町長に推され、十年十月まで在職した。町長辞職後はポプラ・クローバー・種無し柿など多くの草木を町に植えることを広めたり、養豚、食用蛙の養殖を振興した。著書に「忍藩校進脩館沿革略記」がある。肺炎に罹って静養中、昭和二年二月十九日に卒した。享年七十六。町葬で持田の桃林寺に葬る。

五　帝室技芸員となった写真家

小川一真

万延元年八月十五日、下級藩士原田庄左衛門の二男として生れ、四歳の時、小川右太郎の養嗣子となる。幼少時、培根堂に学び、明治六年十四歳の時、上京して有馬学校でイギリス人に写真を学んだ。十三年築地のバラー学校で英語を習得。十五年七月写真術を学ぶために渡米、ボストンのハウスティング写真館で写真技術とコロタイプ印刷術を修めて、明治十七年一月に帰国した。十八年飯田町に玉潤館という写真店を開き、二十一年日本初のコロタイプ写真製版・印刷を始める。二十二年京橋日吉町に移転して、小川写真製版所と改名。同年から宝物取調局の委嘱で古社寺と宝物を撮影した。また、湿板法による皆既日蝕撮影に成功したり、清国万寿山離宮を撮影したりして名声を高めた。さらに、雑誌『写真新報』を発行するとともに、岡倉天心と国華社を結んで、雑誌『国華』を発行し、日本美術を内外に紹介した。二十八年、再渡米して技術を学び、帰国後は宮内省御用係となり、四十三年帝室技芸員を命ぜられた。昭和四年九月六日没、行年七十。

このほか、元京都御留守居役で廃藩後に代言人となって白根県令の訴訟代理人を務め、大岡育造（のちに文部大臣）との示談を成立させた佐藤坤蔵。芳川波山の実子で洋学を修め、外務省翻訳課に勤務し、寄席の経営や文筆活動でも活躍した芳川春涛。洋学館の元教授で、イエール大学へ留学して法学博士となり、東京代言人組合副会長に選ばれた沢田俊三。藩校の数学助教から文部次官に進み、三十四銀行（のちに三和銀行を経て三菱ＵＦＪ銀行に合併）の頭取となった関西財界の重鎮小山健三など、逸材が数多生れた。

なお、忍藩士の子として明治以降に出生した俊秀に、教師を務めたのちに忍町北谷信用組合を創立して、信用金庫大手の埼玉縣信用金庫に発展させた村上義之助、北埼玉郡役所の給仕から苦学の末、司法試験に合格し、検事総長・大審院長・司法大臣を歴任した林頼三郎などがある。

主な引用文献

忍の行田・行田史譚・埼玉県史・埼玉県議会史・行田市史・埼玉人物事典・埼玉県人物志・埼玉県史料叢書・熊谷史話・明治八年士族明細帳・四日市市史・埼玉県行政史・埼玉県史提要・県官履歴

忍藩の藩校について

行田市郷土博物館 学芸員　鈴木 紀三雄

①藩校とは

藩校とは、江戸時代に各地の藩が藩士の子弟の教育のために設立した教育機関のことです。藩士は、藩の体制を支えるとともに、領地を治めるための実務を担いますので、授業内容は主に漢学によって統治者として必要な政治倫理などの人間教養を修得した他、医学や洋学、兵学などの実学も学びました。

江戸時代前期から藩校を置く藩もありましたが、多くの藩で設置されるようになるのは江戸時代半ばを過ぎてからです。藩政改革を進めていく中で、藩政を担う優秀な人材の育成が必要となったのです。この時期には、米沢藩の興譲館や白河藩の立教館、庄内藩の致道館など、現在もその名を広く知られた藩校が設立されました。そして江戸時代後期以降には、ほとんどの藩で藩校が設立されました。江戸時代を通じて設置された数は一説には二五五校ともいわれています。

藩校は藩主である大名家のもとに設置されますので、転封によって藩主が別の大名家に替われば、藩校も新しい大名家のもとで別の学校が設置されます。

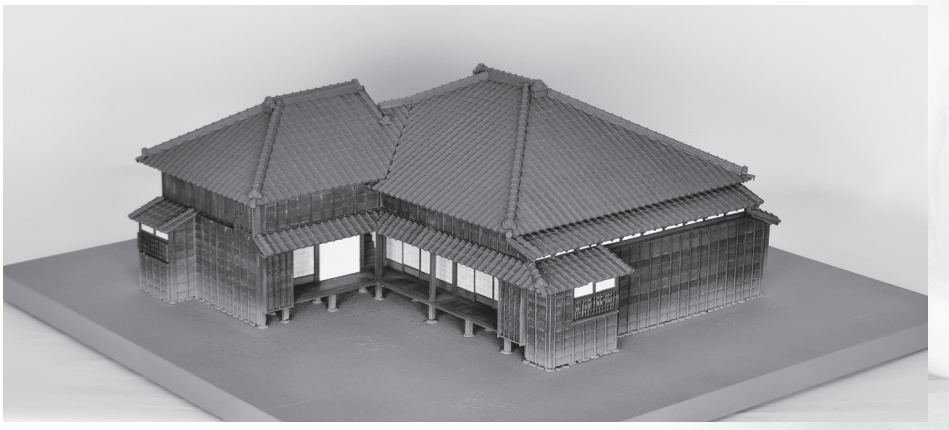
②桑名藩校進脩館の設立

忍藩校進脩館の前身は、桑名藩主松平下総守家が設立した桑名藩校進脩館です。桑名藩では文化七年（一八一〇）に藩儒平井澹所の建言により藩士教育のための学校を設立しました。開校当初は小規模な学校だったようですが、同十年（一八一三）に整備を進め、進脩、医学、兵学の三館が設置されました。進脩館の名の由来は、易教の「君子は徳に進み業を修め時に及ばんと欲するなり」から採られ、幕府の儒官林述斎の子、樫宇が書いた扁額が掲げられました。教授は平井が勤めましたが、文政四年（一八二一）に死去したため、代わって藩士の奥平玄甫が勤めました。

このように桑名藩主松平下総守家は藩校のもとで藩士教育を進めていたのですが、文政六年（一八二三）の三方領知替えにより大きな転機を迎えることになりました。

③忍への転封と芳川波山の登用

文政六年（一八二三）三月、桑名藩主松平忠堯は武蔵国忍へ転封を命じられ、これにより桑名藩校進脩館の歴史は幕を閉じました。忍へ転封となった忠堯は藩校設置を目指しましたが、転封による莫大な費用が藩の財政を圧迫



忍藩校進脩館復元模型（行田市郷土博物館所蔵）

したこともあり、設置はなかなか進みませんでした。

また、教官を勤めた奥平玄甫がその任を解かれたため、新たに教官を探す必要がありました。藩主忠堯は転封の翌年、当時名声の高かった近藤棠軒を藩儒として招きましたが、翌年に急逝しました。そこで幕府の儒官林述斎に相談したところ、推薦を得て家臣としたのが芳川波山です。

波山は、常陸国潮来（茨城県潮来市）の出身で、江戸や長崎で学んだ後、一時期伊豆国下田に因山亭という庵を構え滞在していました。江戸に戻った後、文政九年（一八二六）に林述斎の目にとまり、松平忠堯に仕え、忍藩儒となったのです。

④忍藩校進脩館の設立

波山が藩儒となってからも藩校の設置はなかなか進まず、波山は忍城内や自宅で藩士に学問を教えていました。天保七年（一八三六）、ようやく忍城内下荒井に進脩館の建物が建設されました。前の忍藩主阿部家の時代には藩校がなかったため、進脩館が忍藩で設立された最初の藩校となりました。これは、阿部家の家臣の半数が江戸詰めで、国元よりは江戸で学ぶ藩士が多かったため、藩校の成立に至らなかったためと考えられています。

進脩館の組織は、波山をはじめとする儒者が二～三人の他、これを補佐する代講者や長取、助読などの役職がありました。授業内容は儒学と軍学ですが、儒学は内容を暗誦する素読から始まり、勉強が進むと初学者への指導も担当するようになります。さらに進むと会読や輪読といって当日抽選により講議分担を決め、各自順番に演述し、質疑応答をした後に儒者や長取が出来具合を判定しました。

軍学では三～四尺の砂を入れた箱を囲み、山川を区画したり城郭を模写したりして、攻防戦の形勢を学びました。授業開始は午前八時から始まり、正午には終了したようです。休日は年末年始の他、毎月一・十五・二十八日、五節句などでした。

⑤新たな学校の設置

江戸幕府が倒れ明治新政府が成立すると忍藩でも新たな時代に対応するため、明治元年（一八六八）九月に従来の家老を改め軍務・会計・刑法の惣奉行を設置するなど、藩の職制を一新しました。その中に教育関係の役職として洋学教官・学監・学問所下役が新たに設置されました。これに併せて、培根堂・国学館・洋学館の三校が新設されました。

培根堂は忍城成田門外の東にあった建物二棟を使用しました。初学者の教育を目的として儒書の素読や算学、手習いなどを教えました。授業は午前九時から午後三時ごろまでで、生徒は控え室で手習いの稽古をするとともに順次教室へ呼ばれて素読や算術などを教わりました。

国学館は培根堂の建物一棟を使用して国学を教えました。洋学館は沼橋曲輪内に建設されました。このように新たな学校が設立され、明治初期に忍藩の教育体制は最も充実した時期を迎えました。

⑥藩校の教員たち

藩校で教えた教員には芳川波山の他にもさまざまな分野の人材がいました。波山の娘婿となった芳川襄斎は忍藩儒となり、幕末まで進脩館で教えました。波山の末子である芳川春濤は江戸で蘭学を学んだ後、忍に戻り職制改革の際に洋学教官を命じられ、洋学館開設に力を発揮しました。

吉田庸徳肖像写真（行田市郷土博物館所蔵）

数学では、培根堂の教員となり「西洋度量早見」「洋算早学」などの算術書を執筆した吉田庸徳がいます。青木輔清は洋学館の英語教員となり、明治十五年（一八八二）ごろまでに「横文字独文学」など数十冊の著書を執筆しました。吉田と青木の二人は、明治初期の忍藩出身の知識人として、注目される人物です。

⑦藩校から近代教育へ

明治四年（一八七一）七月の廃藩置県により忍藩は忍県となり、同年十一月の府県合同により岩槻県や浦和県と合併して埼玉県が誕生しました。廃藩により藩校も廃止となりますが、藩が担っていた教育は忍県や埼玉県に引き継がれ、明治五年の学制発布を経て、近代の初等教育を担う体制が次第に整えられていきました。

忍城内や武家地には、藩校に代わって荒井学校や成田学校・北谷学校が設立されました。このうち成田学校は明治十一年（一八七八）に廃止となりますが、荒井学校と北谷学校は同十四年（一八八一）に統合され、再び名称を進脩館とする学校が設立されました。この学校が同十九年（一八八六）の小学校令により進脩館小学校となり、同二十五年（一八九二）に進脩館尋常小学校、同四十一年（一九〇八）には佐間尋常小学校の廃止・分割により、忍進脩館尋常小学校となりました。そして大正十年（一九二一）に生徒の増加や校舎の老朽化のために行田尋常高等小学校と統合し、現在の中央小学校の前身となる忍町尋常高等小学校が広大な忍沼を埋め立てられて設立されました。藩校進脩館の扁額もこの学校に受け継がれ、中央小学校を経て、現在は行田市郷土博物館に展示されています。

忍藩に限らず、全国各地の藩校で学んだ人々が明治という時代のなかで経験や知識を身につけ、日本の近代国家を支える礎となっていったのです。

（本稿は『市報ぎょうだ』平成二十六年三月号～六月号に掲載したものを加除訂正して作製しました。）

参考文献

埼玉県教育委員会編『埼玉県教育史第二巻』（一九六九年）
大石学編『近世藩制・藩校大事典』（吉川弘文館 二〇〇六年）
村山吉廣『忍藩儒芳川波山の生涯と詩業』（明徳出版社 二〇〇九年）

伝・藩校進脩館表門（旧芳川家表門）

忍藩と忍郷友会

公益財団法人 忍郷友会 副会長　渡邉 栄一

忍藩の歴史

全国的にヒットした映画「のぼうの城」で演じられた石田三成の水攻めのように、忍城は落城しなかったが結局は開城（天正18年／１５９０年）し成田氏の支配は終わりました。

忍城跡（現郷土博物館付近）の桜・大正10年頃

忍藩の成立ち

覇者の豊臣秀吉の死去の結果、天下は徳川家康に移りました。天正18年、徳川家康の入府で家康の四男で幼年の松平忠吉が10万石で忍城に入り、城番として松平家忠も忍城に入りました。松平家忠は水攻めで著しく荒廃した忍城と城下町を修築し、後に下総国に移されました。

若年の忠吉は家老小笠原吉次の政務代行により兵農分離、家臣団編成、新田開発、利根川の治水工事等を行いましたが慶長5年関ケ原の戦いに出陣し武功をあげ尾張国52万石に加増移封されました。

その後暫く忍藩は廃されて天領となり、代官の伊奈忠次や大河内久綱らが治めました。

寛永10年に老中松平信綱（久綱の子）が3万石で入りました。信綱は島原の乱鎮圧に総大将として幕府軍を率いて出陣、乱を鎮圧し、寛永16年にはその武功により川越藩6万石に加増移封されました。

藩主阿部家の時代

代わって寛永16年（１６３９年）松平信綱と同じく徳川家光の小姓から後に老中にまで栄進した阿部忠秋が5万石で壬生から入りました。

信綱、忠秋が相次いで老中に就任した結果、忍藩は「老中の藩」として政治的、軍事的にも幕府の重要拠点として見なされるようになりました。

忠秋はその後何度か加増され8万石を領する大名になりました。忠秋は三代将軍家光の信任も厚く四代将軍家綱の老中も務め四代正武は五代将軍綱吉の下で老中を務めています。

こうした事情により阿部家は譜代大名としての性格が方向づけられ、近隣他藩からの老中就任者がいなくなったこともあって、武蔵国の譜代藩の役割を最も長く持ち続けた大名家と言われています。

阿部氏は忠秋の後正能（まさよし）、正武（まさたけ）、正喬（まさたか）、正允（まさちか）、正敏（まさとし）、正識（まさつね）、正由（まさより）、正権（まさのり）の９代１８４年間に亘り忍藩主を務め、文政6年（１８２３年）まさかの幕府の三方領知替え政策により正権の時奥州白河藩へ移封となりました。当時は10万石でした。

この間歴代藩主は、5人が幕府老中を務めたほか京都所司代、大坂城代等の要職を歴任しました。内政面では忍城の修復、城下町の整備、家臣団の規律制定、度々起きた大洪水対策、浅間山噴火と大飢饉対策、二度に亘る藩内一揆の鎮静化等で藩財政は度々逼迫していたようです。しかしこの頃忍城の

大正10年頃の忍沼（現水城公園はその一部）風景、投網を打つ人

城下町の姿は今日の旧市街地の基礎が略出来あがっていました。

藩主奥平松平家の時代

代わって、文政6年に桑名より奥平松平忠堯（ただたか）（松平家9代）が10万石で入りました。奥平松平家の始祖は徳川家康の娘亀姫が嫁いだ奥平信昌の四男忠明（ただあきら）です。忠堯の時代に藩校「進脩館」が忍に再興されました（天保7年1836年）。「進脩館」は松平家第7代当主忠和（ただとも）・第8代当主忠翼（ただすけ）の時代に既に桑名で企画され創設されていました。

藩校教育の中心は身を清める教え、自分の心を治める「修身斉家治国平天下」の思想で道徳的な学問で先ず人間力、道徳性を育み、その上に文武両道の知識、文芸、武芸、歴史、数学、技術を、後には蘭学、絵画から外国語まで、武士の子弟を中心に芳川波山、田中算翁（さんおう）、加藤古風（ひさかぜ）等錚々たる当代一流の学者が礼儀正しく国家社会に役立つように教えていました。

その後藩主は忠彦（たださと）（松平家10代）から忠国（ただくに）（松平家11代）へと替り，忠国は房総半島沿岸警備を任じられ、ペリー来航後は江戸湾お台場の警備などに当たっていました。一方武蔵国においては安政の大地震と大洪水で領内が大被害を受けた事などにより藩の財政は常に逼迫状態であったといわれています。

慶応3年の大政奉還後、藩主忠誠（ただざね）（松平家12代）は帰趨に迷ったが前藩主忠国の登場もあって新政府側に与することに決し、戊辰戦争に際し忍藩は東北に出陣しました。明治4年7月の廃藩置県で忍藩は廃藩、代わって忍県が設置されましたが4ヶ月後に埼玉県が発足統合されました。最後の忠敬（ただのり）（松平家13代）まで5人の藩主が48年間忍藩を統治しました。最後の禄高は10万石でした。この間藩校進脩館、藩学培根堂、洋学館、国学館その他の寺小屋、私塾等数多の教育機関で学んだ子弟は数多く居ました。こうした忍藩の教育重視は藩士のみならずやがて北武蔵国の住民の生活文化と意識の向上にも良い影響を与えていたことについて、元㈶日本立地センター理事長小島慶三氏がその著書「江戸の産業ルネッサンス」の中で次のように述べています。「意識の変化に伴う農業生産性の向上のほか第一に知識水準が非常に高くなっていた。第二に宗教が世俗化してきて倫理的環境が充足してきた。第三に藩と村落共同体の結びつきが合理的にオーガナイズされてきた。第四に忍藩の下級武士と農民の上層クラス、豪商などのエリートの主体的な能力が優れてきていて近代化のリーダーが生まれてきていた。等々」であります。

大正11年開通した秩父鉄道、当時谷郷口六つ門近を走る秩父電車

こうした教育を受けた藩士や各界のエリートたちも明治の廃藩置県という革命にも近い大変革とともに苦境に立たされました。しかしやがて新しい国づくりの為に彼等は必要とされ、学校教師や公官吏、足袋商其の他実業人、農業等官民を問わず各分野に転出し、特に東京府、埼玉県内を中心にして全国に輩出していきました。

忍郷友会の創立

明治38年（1905年）10月22日東京向島百花園で第1回の集会が開催され、下記の設立主旨を踏まえて忍郷友会が事実上創立発足しました。

出席した設立主唱者には次のような方々が居りました。松平氏（旧藩主末裔）、伊藤氏（元入間郡長）、林氏（東京地裁判事）、金沢氏（医師）、高木氏（弁護士）、益田氏（日本画家）、小林氏（日本画家）、江草氏（有斐閣主）、笹岡氏（会計検査院検査官）、湯浅氏（早大学生）、島氏（日本銀行員）でいずれも旧士族の出身者であります。

明治38年12月発行の「忍郷友会々

報」第一号に記載されている「本会の設立」目的の中で「士族のほか忍に所縁の一般の人達も参加して、交流を深めることとなり、会員相互の親睦、個人の智徳の涵養を目指しながら、最初は東京に遊学する忍の学生の援助をする等、後継者の育成と郷土の文化の発展にも意を尽くして年月を重ねていきます」とあります。後に昭和13年当会は財団法人に組織変えされましたが、初代会長に就任した林頼三郎（司法大臣、中大総長、創立の主唱者の一人）は「世上動もすれば、殊に最近の風潮からこういった会を因習に囚われたもの、時代に逆行するもの等の批判を加

水村大宮市助役就任祝賀会で初代忍郷友会長 林頼三郎氏と
大澤龍次郎氏を囲む会員一同・昭和31年4月6日

うる向きもありますが、己の故郷を愛し、己の住む地の発展を希うの情は人間本来の自然の情であります」と本会の目的が毅然たるものであることを述べております。

古代ローマの哲学者キケロは「あらゆる人間愛の中で、最も重要なのは祖国愛である。祖国愛を持つに至る出発点は自分の住む町、故郷を愛することである」と言っていますが、忍郷友会の主唱者を始め其の後の維持発展に尽くした人達は、藩校教育を学んだか、その子孫か、その影響を受けた人達が多勢居られます。

明年創立１１０周年を迎えます

平成17年10月22日行田市において財団法人忍郷友会の創立１００周年記念式典が開催されました。来賓には埼玉県知事上田清司氏、徳川宗家第18代当主徳川恒孝氏ら多数の方が見えられ盛大に賑々しく開催されました。

記念講演として徳川恒孝氏から「江戸２５０年の泰平を支えた仕組み」、東京都庭園美術館主任学芸員の岡塚章子氏から「写真の機能と有用性を熟知していた人物〈小川一真〉」と題して国家の歴史や郷土が輩出した偉人に因んだ講演がありました。

来賓各位からは百年の本会の業績について敬意と賞賛の祝辞を多数いただきました。中でも会員の中から会の事業意外に個人として地元の教育・文化事業の為に多額の資金を醵出又は貢献された松崎伊三郎（鞄商）、大澤龍次郎（大澤証券）、江草四郎（有斐閣）各氏をはじめとする多くの篤志家が出ていることも本会の特性として銘記される事項であります。

最近の本会の業績の中から一部を紹介しますと、青少年育成のための三端懇話会（当代一流人に会い、講演、懇談、会食）の開催、少年の主張大会の後援、読書推進運動の為の読み聞かせボランティアスキルアップの講演会の開催、学校図書の寄贈、論語素読教室の開催、論語かるた大会等何れも継続型の事業です。

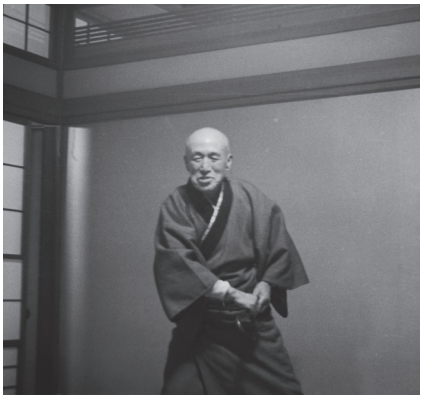
一般市民向けには論語教室の開催、年2回の各種講演会の開催等です。

これを総合的に見れば「人の掘り起こし、人つくりの支援活動、そして会員の親睦交流」ではないでしょうか。忍郷友会は明年創立１１０周年を迎えます。この間会の運営を担っている人達を見ると、藩校「進脩館」その他での教育で培った「人間愛」「郷土愛」の精神が今に繋がっている想いが致します。

この度明治29年以来、初めて見直しされた公益法人制度改革3法の施行により忍郷友会は本年4月より新たに公益財団法人忍郷友会に生まれ変わりました。

そして更に本年7月5日一般社団法人漢字文化振興協会主催により開催される「第12回全国藩校サミット行田大会」の実行委員会の委員長に当会の会長松平忠昌が就任し、当会は組織を挙げてホストすることになりました。

行田大会の開催目的は「藩校教育の理念を今に」「漢字文化の振興」「行田の文化的まちおこし」でありますが、１１０周年を迎える忍郷友会にとっても記念すべき意義ある参加事業ではなかったでしょうか。



役員懇親会で余興を演じる松平忠寿名誉会長
昭和38年頃

藩校教育を現代に活かす
忍藩（行田市）三つの教育の場の推移

忍郷友会理事・進脩塾主幹　田代 敬二

一．民間教育の場・古典講座「進脩塾」設立

バブル絶頂期にあった昭和六十年代初頭、日本社会は各所に精神文化の凋落を露呈しつつあった。憂慮すべき風潮の中で、隣接する吹上町に有志の手により東洋思想講座が開講した。招かれて参加した我々は、そこで始めて「大学」に接し、長年に亘って頭の中をしめていた迷妄が一度に晴れる思いがした。参加した同志の中には当時の行田商工会議所会頭清水孝男氏の姿があった。十数回、同講座に通ううち会頭が「街づくりは人づくりからだ。人づくりは我づくりだ。この修己治人の勉強塾を行田市にも作ろうじゃないか」と提案されたので早速行田市における古典講座開講の動きが活発化した。塾の名称・会場・時間など審議が進む中、松下村塾の絵図面を持ち込んだメンバーが居り、彼はこう言った。「松下村塾に学べを合言葉にして呼びかけて見てはどうだろうか」。迂闊にも私はこの話に乗り、㈶忍郷友会の理事会の折計画を提案した。この時、忍郷友会第三代会長（忍藩主第十五代当主）松平忠晃公はこれを聞き「松下村塾は長州でしょう。ここには進脩館がありますよ。それを言うなら進脩館に学べではありませんか」と申された。この一言が決め手となり、名称は忍藩校「進脩館」から二字を頂いて進脩塾とした。行田商工会議所会頭清水孝男氏が発起人となって、進脩塾開設についての趣意書が起草され、塾生を募った。平成二年十二月二日、同憂同好の志二十余名が集まって、記念すべき第一回講座が開かれたのである。学ぶところは四書五経の中「大学」、講師は郷学研修所（昭和全期を通じて一世の師表天下の木鐸と仰がれた安岡正篤先生創設）所長柳橋由雄先生、会場は行田市商工センター。毎月第四土曜日の夜を定例講座とし、爾来今日まで二十四年間、開催した講座数は一九〇回を超える。内容も「大学」「中庸」「論語」と続き、半ばにして講師の柳橋先生は卒せられたが、後は荒井桂先生に引き継がれた。現在は「孟子」及び「講孟劄記」を教材とし、単なる知識吸収ばかりでなく〝修己治人・順徳強化〟の学問として講ぜられ、且つ実践すべく聴講が続いている。毎回三十余名の受講者があり、講義の模様は行田ケーブルテレビに集録され毎月数回にわたって放映されている。

二．公民共催の場・忍藩子ども塾素読教室

切っ掛けとなった漢字文化講演会

平成十三年度より㈶忍郷友会は、漢字文化振興会と連携して市民公開講座「漢字文化講演会」を年一回開くようになった。演題としては／漢詩の魅力／漢字の成り立ち／論語入門／埼玉の漢字／白楽天の老後／おもしろ漢字ワールド／漢字の面白さ再発見／芳川波山の漢詩／栄光の忍藩校教育／論語に学ぶ家族のあり方／などなどが講じられた中で、昔、寺子屋をやっていた市内の旧家の方から、当時使用していた教本「三字経」の提供を受けたことがあった。この発見を機に〝寺子屋で

何を学んだか〟をテーマに「三字経を読む」と題した市民公開講座を開く事になったが、講演会の効果をより高めたいと考え、次の様な段取りで寺子屋風景を演出し実行した。（1）先ず、市内有力幼稚園に出向き、趣旨を説明して充分な理解を得た上で、素読の体験学習を行なわせてもらうことにした。（2）父兄には「素読とは何か／その効用と体験学習のすすめ」と記載したチラシを配布。（3）チラシの呼びかけに応じて集まった八名の希望者（園児）に対して（4）一日二十分。漢詩・論語の素読体験学習を八日間にわたって行った。

こうした準備を重ねた上で「三字経」講座の日を迎えた。講座に先立ってのぞんだ素読発表を観た父兄来場者は全員涙し、会場は感動の嵐に巻きこまれ、称賛の拍手が鳴り止まなかった。

しかし、誰よりも感激し、素読というものの快感を味わったのは園児たち自身であったと思われる。子どもたちに、体験学習の終わりを告げた時、八名の園児たちは口ぐちに、「もっとやりたい、もっとやりたい」と叫んだのだった。

この子どもたちの声に押されて、進脩塾素読教室が開かれることになった。会場としては忍藩校に縁の深い忍城址公園内行田市郷土博物館を市長の理解と協賛を得て解放してもらうことが決った。そして平成十七年四月より、毎月第一、第二、第三土曜日を定例開催と定め、午前中八名の子どもたちの朗々たる論語・漢詩素読の声が響きわたるようになったのである。

忍藩子ども塾素読教室へと改称

平成二十三年度より「進脩塾素読教室」は市の推進する子ども大学の施策と合致するところから市教育委員会との共催事業となり、塾生募集を教育委員会が行ない、指導は㈶忍郷友会が担当する形となり、名称を「忍藩子ども塾素読教室と改称した。このことは、塾生募集の点で大変有効に働き、それまでの五年間は毎年数名の入塾者に過ぎなかったものがこの年から、一挙に二十余名の入塾生を数えるに至っている。現在は、初級組、中級一組、中級二組、上級組の四クラスがあり、五名の指導員（いづれも㈶忍郷友会々員）が指導に当っている。昨年より、中級一組～二組の指導にはいづれも今は中学生となった第一期生、第二期生が一部担当するようになり「兄弟相共に学ぶ」の塾風が育ちつゝあることは喜ばしい限りである。

天眼寺親子素読教室

他にも㈶忍郷友会では（東京都台東区谷中に在る）忍藩主松平家の墓所天眼寺の協賛を得て同寺の壇信徒（※松平家旧家臣が多数）及びその縁者の方々に回状を廻わして希望者を募り平成二十四年度より「天眼寺（論語・漢詩）親子素読教室」を開講している。

三．公教育の場

行田市立埼玉小学校の素読教室

さいたま県名発祥の地行田市埼玉地区は、古代、中世、近世の史蹟、伝説、史話など貴重な伝承文化の息づく地域である。

市立埼玉小学校はその中程に位置し、幾多の俊秀を輩出した伝統ある学校である。その第二十七代、長原順子校長は、忍藩子ども塾の動勢を伝え聞き、朝の読書の時間帯をいかして素読教室ができないものかと考えた。

㈶忍郷友会ならびに忍藩子ども塾と学校側三者で相談・協議の結果スタートしたのが埼玉小学校素読教室である。平成二十四年六月より忍藩子ども塾から二名の指導員が出向し、毎週水曜日、朝八時十分から二十分間論語、漢詩の素読が始まった。六年生二クラスを皮切りに～一年生までを六週間かけて一巡し、これを繰返すこととなった。僅か二十分間であるが、指導員、担任教師、児童、三位一体となって声を張り上げての素読は、朝の爽快感を伴い予期した以上の成果を上げている。翌春、長原校長は転任されたが、同女子の積極果敢な素読教室への挑戦は、後任の井沢一博校長に引き継がれ、毎週水曜日の早朝には校内の隅々に朗唱の声がこだましている。

論語・漢詩・小学生公開素読教室

市立埼玉小学校の課外素読教室の成果を試される機会は思いもかけず早く訪れた。第十二回全国藩校サミット行田大会である。同大会の行事プログラムに忍藩子ども塾と埼玉小学校児童参加による合同素読教室が組み込まれることになった。これを受けて急遽リハーサルが行なわれた。

平成二十六年五月十八日、行田市産

業文化会館において、小学生公開素読教室が市内十六小学校関係者（児童・父兄・教育関係者）を前に盛大に挙行された。

舞台上には忍藩子ども塾生四十余名埼玉小児童百余名が上がり、合同で論語、漢詩を斉唱する壮快な姿があった。

〝一粒の麦実りて明日を呼ぶ〟

平成十七年二月、市内幼稚園の一室で、八名の園児による体験学習から始まった素読教室は「もっとやりたい、もっとやりたい」という園児の声に押されて開講したものである。五年後には行政の理解協力を得て、五十余名という素読教室に成長し、更に四年を経た後には公教育の場に採用されるまでになった。今般、百六十余名による公開素読教室の開催という事実（一石）はその波紋が市内十六校にまで広がろうとしている。

今回特筆すべきは、公開素読教室並に藩校サミットにおける合同素読教室において、声高らかに朗唱を指導しているのが、あの幼なかった園児の成長した姿であるという事である。正に〝一粒の麦、実りて明日を呼ぶ〟の感懐を覚えることしきりなものがある。

最後に、一般社団法人漢字文化振興協会々長石川忠久先生が、この忍領の子どもたちに為に作詩された「忍城偶城」を記して結語としたい。

忍城偶成　岳堂／三百諸侯　美風を競う／進脩の名古し武州の中／児童齋唱す先賢の句／看る可し　郷黌化育の功

参考　その他の活動

一．論語かるた取り大会
　H19・20・21年
二．漢文検定試験
　H22・23・24・25年
三．忍藩藩儒の顕彰講座
　①芳川波山の生涯と詩業　H21年
　②近藤棠軒先生の「宋名臣言行録」
　　H24年
　③第二回　〃　「宋名臣言行録」
　　H25年
四．素読教本「論語」「漢詩」発刊
五．素読教本「古事記」発刊と素読会

展示物のご案内

古代蓮 宥座の器（ゆうざき）

空（から）の時は傾（かたむ）き、水をほどほどに入れると起きてきます。また、いっぱいに入れるとひっくり返ります。

『論語』で有名な孔子（こうし）は、「満（み）ちて覆（くつがえ）らないものはいない」と弟子たちに教えました。

さらに孔子と弟子たちの話は続き、弟子の子路（しろ）は「満ちても覆らない方法はありませんか?」とたずねました。

孔子は「ある」と、謙虚（けんきょ）、譲（ゆず）ることの大切さを述べ、「そのために損をすることだ」、と弟子たちに教訓しました。

すなわち、社会を良くするために努めることです。

参照 『荀子』『孔子家語』

〈文責・針生清司〉

春には桜の名所として親しまれている　丸墓山古墳

古代のロマンと歴史が息づくまち行田

埼玉県北部に位置する行田市は、北は利根川を境に群馬県と隣接する
豊かな自然に恵まれた田園地帯です。
市内には今も数多くの文化や史跡が残されており、年間を通じ様々な催し物も盛んに行われ、
沢山の人々に親しまれています。

東日本最大の古墳群
埼玉古墳群

全国でも有数の規模を誇る埼玉古墳群は市南部の埼玉地区にあり、かつて「百塚」の地名が残るほどの大古墳群でした。東国古代史の宝庫として多くの史跡を有しており、昭和13年に国史跡に指定されました。現在、古墳群周辺はさきたま古墳公園として整備されており、園内には「県立さきたま史跡の博物館」やはにわ作りが体験できる「はにわの館」などがあり、多くの人が訪れます。

金の文字が刻まれた鉄剣が出土した稲荷山古墳

稲荷山古墳は、埼玉古墳群の中で2番目に大きい前方後円墳で、「金錯銘鉄剣」が出土したことで全国に知られています。この鉄剣は昭和43年の発掘調査の際に出土し、10年後、奈良県の元興寺文化財研究所のレントゲン撮影によって一一五文字の金象嵌が確認されました。

古代の金石文としては全国でもっとも長文で、関東では初めてのものです。銘文の内容は日本書紀の記述と符合するともいわれ、五世紀の関東と大和朝廷との関係、ひいては日本古代史を解明するうえで貴重な資料となっています。

なお、稲荷山古墳の築造は5世紀末から6世紀初頭頃と考えられ、昭和14年、国の史跡に指定されたとき、古墳の頂上部分に稲荷社が祀られていたことからこの名がつきました。

武人埴輪頭部
稲荷山古墳周堀出土品

古墳の内部、石室へ入れる将軍山古墳

将軍山古墳は、全長90m、後円部の直径39m、前方部の幅68m、形態は堀が二重にめぐる前方後円墳です。後円部にたてられている「将軍山古墳展示館」には、残存していた横穴式石室と、そこから出土した副葬品を当時の状態に復元し、保存しながら展示しています。

この展示館は、実物の横穴式石室を建物の中から直接見ることができる、全国でも初めての施設です。

日本最大の円墳丸墓山古墳

丸墓山古墳は、直径105m、日本最大の円墳として有名です。墳丘の高さは埼玉古墳群の中で最も高く、頂上に立つと隣に稲荷山古墳、その向こうに将軍山古墳の墳丘がよく見えます。埋葬施設は発掘されていないため、詳しいことはわかりませんが、出土した埴輪から6世紀前半ころに造られたと推定されています。

後の戦国時代、豊臣秀吉の関東平定の際に、石田三成による忍城への水攻めが行われましたが、丸墓山古墳の上に陣が張られたといわれています。

〈表〉

〈裏〉

国宝 金錯銘鉄剣
5世紀後半の古代さきたまの地を治めた豪族ヲワケの臣、その言葉が黄金の漢字でつづられている

県名発祥の由来

およそ1200年前の奈良時代にできた『万葉集』の中に「前玉の小埼の沼」や「佐吉多万の津」の歌があります。この「さきたま」は、現在の行田市埼玉周辺をさす地名であり、今も神社や字名は「さきたま」と読みます。

また、1100年前の平安時代にできた『倭名類聚抄』には、より広い郡名として「埼玉・佐伊太末」とあり、埼玉県の東部地域を「さいたま」郡と呼んでいたことがわかります。

このように、小さな地名、「さきたま」が変化して、より広い郡名「さいたま」として用いられるようになっていったのです。

県立さきたま史跡の博物館／行田市埼玉4834　TEL. 048-559-1111　P普通車303台、大型車33台
[開館時間] 9:00～16:30（入館受付は16:00まで）※7月1日～8月31日は 9:00～17:00（入館受付は16:30まで）
[休館日] 月曜日（祝日・振替休日及び5月2日、埼玉県民の日（11月14日）を除く）、年末年始　※その他 臨時休館する場合あり

忍藩十万石の面影残る名城

忍城（おしじょう）

室町時代の文明年間（15世紀後半）、成田下総守顕泰（あきやす）によって築城されたと伝えられている「忍城」。この城は、湿地帯を巧みに利用した城であったため、守りやすく攻めにくい、関東きっての名城とうたわれました。その歴史は明治維新まで続きます。

水攻めに耐えた「浮き城（うしろ）」

天正18年（一五九〇）、豊臣秀吉が小田原の北条氏を攻めたおり、時の城主成田氏長（なりたうじなが）は北条氏に味方しました。氏長が小田原城に籠城中、秀吉の家臣であった石田三成が軍勢を引き連れ忍城を包囲し、全長28ｋｍにおよぶ堤を築き、利根川・荒川の水を引き入れて水攻めにしました。

しかし、水が増しても忍城は落城しません。「それは城が浮くからだ」と噂され、「浮き城」という別名が生まれたと伝えられています。

忍城は小田原城降伏ののち開城し、ここに成田氏の支配は終わりを告げました。

しかし、江戸時代には親藩・譜代16人の城主が在城し、忍藩十万石の要として栄えていきました。

市内に残る城下町の面影

明治維新とともに、忍城は取り壊されてしまいましたが、市内には今も城下町当時の面影を残すところがあります。そのひとつが、市の南部、堤根（つつみね）地区に残る「石田堤（いしだつつみ）」です。

石田堤は、石田三成の水攻めでつくられた堤の一部で、開発などで原形は損なわれていますが、かつて堤根の名主・増田五左衛門豊純が、「石田堤碑」をたてて保存に努めたと伝えられています。

石田堤と並んで、忍城をしのぶものが「時鐘（じしょう）」です。この鐘は、享保2年（一七一七）伊勢桑名藩主松平忠雅によって鋳造され、文政6年（一八二三）に松平氏が桑名から忍へ移封されるのにともなって、忍城へ移されたものです。現在、忍城址の鐘楼につるされた鐘は再造されたもので、本物は郷土博物館に展示されています。

天守閣がなかった忍城にとって、中心的建築物だったのが「御三階櫓（ごさんかいやぐら）」でした。現在の櫓は昭和63年に再建されたもので、その一部は行田市郷土博物館の展示室となっており、行田の歴史を語り継いでいます。

忍城御三階櫓　現在は展望室や行田の今昔を紹介する展示室となっている

鐘楼

行田市郷土博物館／行田市本丸17-23　TEL. 048-554-5911　Ⓟ61台
［開館時間］9:00 ～16:30（入館受付は16:00まで）
［休館日］月曜日（祝日・休日を除く）、祝祭日の翌日（土・日は開館）毎月第4金曜日（テーマ展・企画展開催中は開館）、年末年始

神秘的な花蓮の美しさを満喫できる
古代蓮の里

古代蓮の里公園内では、毎年6月下旬から8月上旬にかけて、42種類12万株の花蓮を見ることができます。花弁の数が少ない原始的な形態を持つ行田蓮は、約一四〇〇～三〇〇〇年前の蓮であると言われています。

また、園内には他にも水生植物園、水鳥の池、牡丹園、梅林、桜の木のあるお花見広場があり、年間を通して自然の美に触れることができます。冒険遊び場や見晴らしの丘は、いつも家族連れで賑わっています。

行田蓮（古代蓮）

永い眠りから目を覚ました行田蓮

行田市の天然記念物に指定されている行田蓮（古代蓮）は、古代蓮の里にほど近い公共施設建設工事の際に、偶然出土した種子が自然発芽し甦り、池に開花していたところを発見されました。地中深く眠っていた多くの蓮の実が出土し、自然発芽して一斉に開花した事は極めて珍しいことといわれています。

古代蓮の里では、行田市のシンボルともなっている古代蓮を育てており、可憐な古えの花をお楽しみいただいております。

地上50mから眺める大パノラマ古代蓮会館展望タワー

公園内にそびえたつタワーが目印の古代蓮会館は、展示室、展望室、休憩所、研修室の4つに分かれています。

1階展示室では、蓮に関するさまざまな資料を展示しており、一年を通して古代蓮の魅力を楽しむことができます。また、行田の自然も紹介しており、迫力ある展示をご覧頂く事ができます。

また、2階展望室では、高さ50mからの景色を眺めることができ、北に利根大堰、さらには群馬県から日光の山々、西には忍城御三階櫓の建つ行田の中心街から熊谷・前橋方面まで、手前にはさきたま古墳公園とゆったりした旧忍川の流れが広がっています。南には奥秩父連峰と富士山、さいたま新都心や、条件が良ければ新宿の副都心も見ることができます。広大な関東平野の風景をお楽しみいただけます。

古代蓮会館
蓮池の水面から花茎が立ち上がっている様子をイメージした展望タワー

古代蓮会館／行田市小針2375番地1　TEL. 048-559-0770
P490台　［開館時間］通常期（6月下旬～8月上旬以外）9:00～16:30（入館受付は16:00まで）、蓮の開花期（6月下旬～8月上旬）7:00～16:30（入館受付は16:00まで）　［休館日］月曜日（祝日を除く）、祝祭日の翌日（土・日は開館）、年末年始　※蓮の開花期（6月下旬～8月上旬）は無休

参加御当主紹介

藩校概要［参加藩校紹介］

参加御当主紹介

①国名
②藩名
③家名
④代
⑤家祖
⑥幕末を迎えた時の藩へ転封になった年号
⑦家訓
⑧生年・最終学歴・職歴・団体役職・その他

酒井 忠久
［さかいただひさ］

①出羽国　②庄内藩　③酒井家　④第18代
⑤酒井忠次　⑥元和8年（1622）
⑧萩生徂徠の提唱する徂徠学を教学とした。昭和21年5月3日生まれ。成蹊大学政経学部卒
公益財団法人 致道博物館 代表理事 館長

南部 利文
［なんぶとしふみ］

①江戸初期は陸奥 又は奥州 江戸中期以降 陸中　②盛岡藩　③南部家　④第46代　⑤南部光行　⑦質実剛健　⑧藩主の子弟もその教育を受けた。1970年東京工業専門学校。日産プリンス東京販売～㈲オリックスセラミック 代表取締役　南部興産㈱代表取締役

上杉 邦憲
［うえすぎくにのり］

①出羽国　②米澤藩　③上杉家　④第17代
⑤上杉謙信　⑥慶長6年（1601）
⑦宝在心　⑧昭和18年生まれ。東京大学大学院工学研究系修士課程修了・工学博士　現在JAXA名誉教授　米沢市上杉博物館名誉館長

伊達 泰宗
［だてやすむね］

①陸奥国　②仙台藩　③伊達家　④第18代　⑤伊達家始祖：伊達朝宗（だてともむね）仙台藩祖：伊達政宗（だてまさむね）　⑥慶長5年（1601）12月24日仙台開府　⑦「祖先を崇拝する者は、我が家の隆昌を願う人であり、また、我が家を重んずる者は、祖先を崇拝する者である（中略）将来に伸びんとする青年青女は殊に過去における歴史の偉大さを思うと同時に歴史を産んだ祖先の努力を忘れてはいけない、祖先を崇拝する者は必ず自己を尊重する人である」　⑧伊達伯爵邸跡地にある聖ウルスラ学院英智小・中・高等学校において、学校必修教科として「仙台藩作法」（礼法）と武道、論語の素読、漢文検定などが実施されている。また、伊達家伯記念會では、一般及び企業を対象に「仙台藩作法」の指導を行っている。

板倉 敏和
［いたくらとしかず］

①奥州福島（陸奥国）　②福島藩　③板倉家
④第20代　⑤板倉重昌（初代京都所司代　板倉勝重二男）　⑥1702年　⑧昭和24年10月27日生まれ。東京大学法学部卒。旧自治省、総務省に勤務。地方公務員共済組合連合会理事長（現在）

内藤　博

［ないとうひろし］

①陸奥国（磐城国）　②湯長谷藩　③内藤家
④第17代　⑤内藤正亮（当時　遠山姓を名乗る）
⑧譜代大名で転封が全くなかったのは特質である。昭和10年8月生まれ。日本大学芸術学部卒業。自営業（石油関連）。致道会名誉会長

徳川 斉正

［とくがわなりまさ］

①常陸国　②水戸藩　③徳川家　④第15代
⑤徳川頼房　⑥慶長14年（１６０９）
⑧昭和33年生まれ。尊敬する人は、徳川光圀公。趣味は、旅行、音楽鑑賞、日本美術鑑賞。座右の銘・信条は、一期一会。

丹羽 長聰

［にわながとし］

①陸奥国　②二本松藩　③丹羽家　④第18代
⑤丹羽長秀　⑥寛永20年（１６４３）
⑧昭和19年生まれ。尊敬する人は、丹羽長秀、丹羽光重。趣味は、釣り、読書、史跡探訪。

水野 勝之

［みずのかつゆき］

①下総国　②結城藩　③水野家　④第20代
⑤水野勝成　⑥元禄13年（１７００）
⑧昭和18年生まれ。尊敬する人は、水野勝成。趣味は、ゴルフ、音楽、歴史研究。

阿部正靖

［あべまさやす］

①奥州・磐城　②棚倉藩　③阿部家　④第22代
⑤阿部忠吉　⑥慶応3年（１８６７）
⑧昭和45年慶應義塾大学卒業、平成22年株式会社伊勢丹退職。尊敬する人は、阿部正外。趣味は、歴史書（近代史）の読書。座右の銘・信条は、大過なくすぎる事が最大の大過である。

鳥居 忠明

［とりいただあきら］

①下野国　②壬生藩　③鳥居家　④第16代
⑤鳥居元忠　⑥正徳2年（１７１２）
⑦文武共に精出、成徳達材

松平 忠昌
［まつだいらただまさ］

①武蔵国　②忍藩　③松平家　④第16代
⑧昭和19年生まれ。昭和42年学習院大学経済学部卒業後、同年4月住友商事入社、勤務を経て、平成12年石野ガスケット株式会社取締役を退任、平成20年日産埼玉サティオ退社。公益財団法人忍郷友会会長。尊敬する人は、２５０年を超える太平の世を築かれた徳川家康公。趣味はゴルフ、音楽鑑賞・演奏、読書など。座右の銘は、「千里の道は一歩より始まる」、信条は「出逢いと思い遣り」。

牧野 忠由
［まきのただより］

①越後国　②三根山藩　③牧野家　④第15代
⑤牧野定成　⑥寛永11年（１６３４）　⑦常在戦場（参集牛窪御壁書）　⑧昭和19年7月2日
学習院大学理学部物理学科卒業。松下電器産業入社。現在一般社団法人尚友倶楽部常務理事

堀田 正典
［ほったまさのり］

①下総国　②佐倉藩　③佐倉堀田家　④第13代
⑤家光の腹心　堀田正盛の三男堀田正俊
⑥延享3年（１７４６）　⑦御家三カ条
⑧昭和26年生まれ。趣味は、ゴルフ、テニス、囲碁。

牧野 忠昌
［まきのただまさ］

①越後国　②長岡藩　③牧野家　④第17代
⑤牧野忠成　⑥元和4年（１６１８）
⑦剛健質朴
⑧初代から幕末まで藩は移封がなかった（２５０年間）

徳川 恒孝
［とくがわつねなり］

①武蔵国　②江戸幕府　③徳川宗家　④第18代
⑧昭和15年生まれ。学習院大学在学中、2年間英国留学。同大学政経学部卒業後、日本郵船株式会社に入社。二度にわたるニューヨーク勤務などを経て同社代表取締役副社長、平成14年から同社顧問、平成21年2月退社。財団法人斯文会名誉会長。公益財団法人徳川記念財団理事長。ＷＷＦ世界保護基金ジャパン会長。

本多 紀雄
［ほんだのりお］

①駿河国　②田中藩　③本多家　④第16代
⑤本多正重　⑥享保15年（１９７０）
⑧昭和27年生まれ。昭和51年3月成蹊大学経済学部卒業、同年4月東京海上火災保険株式会社入社、現在に至る。趣味は、スポーツ観戦、音楽鑑賞。

大河内 元冬
［おおこうちもとふゆ］

①三河国　②吉田藩　③大河内家　④第15代
⑧昭和21年生まれ。昭和48年早稲田大学機械工学科修士課程卒業。趣味は、読書、ゴルフ、里山歩き（トレッキング含め）、スキューバダイビング、サイクリング、ビリヤードなど

京極 高幸
［きょうごくたかゆき］

①丹後国　②峰山藩　③京極家　④第16代
⑤京極高通　⑥元和8年（1622）
⑧昭和40年学習院大学経済学部卒業。尊敬する人は、徳川家康。趣味は、近代史研究。座右の銘・信条は、敬神崇祖。

松平 定純
［まつだいらさだずみ］

①伊勢国　②桑名藩　③松平家　④第17代
⑤松平定綱　⑥文政6年（1823）
⑦『質素倹約』
⑧昭和15年（1940）12月14日　カリフォルニア州、Hartnell College 出身　RCA, General Electric, Segate Techinology にてIPO（国際購買機構）を歴任

徳川 宜子
［とくがわことこ］

①紀伊国　②紀州藩　③紀州徳川家　④第19代
⑤徳川頼宣　⑥元和5年（1619）
⑦9代藩主徳川治貞「礼法に遵い言行を正し、節倹を崇び奢侈を止め、政務を勤め宴安を戒め」
⑧江戸時代の「学習館」は役人を養成する学校であったが、明治以降は教員養成学校へ目的が変更されている。

牧野 行茂
［まきのゆきしげ］

①丹後国　②田辺藩　③牧野家　④第16代
⑤牧野讃岐守康成　⑥寛文8年（1668）
⑧昭和17年生まれ。尊敬する人は、白洲次郎。趣味は、旅行、散歩、料理作り、ゴルフ。座右の銘・信条は、美感遊創（人生で美意識、感性、遊び心、創造性をバランス良く持つことが必要である。）

板倉 重徳
［いたくらしげのり］

①備中国　②備中松山藩　③板倉家
④第19代　⑤板倉勝重　⑥1744年
⑧昭和50年生まれ。尊敬する人は、板倉重俊（父）。趣味は、ゴルフ、子供と遊ぶ。

関　勝
［せきまさる］

①備中国　②新見藩　③関家　④第13代
⑤関　長政　⑥元禄10年
⑧昭和14年生まれ。尊敬する人は、丸川松隠。趣味は、歴史小説。

伊達 宗信
［だてむねのぶ］

①伊予国　②宇和島藩　③伊達家　④第13代
⑤伊達秀宗（伊達正宗公の長子）
⑥元和元年（１６１５）　⑦伊達正宗公御教諭

阿部 正紘
［あべまさひろ］

①備後福山　②福山藩　③阿部家　④第17代
⑤阿部正勝　⑥宝永７年（１７１０）

山内 豊功
［やまうちとよこと］

①土佐国　②土佐藩　③山内家　④第19代
⑤山内一豊　⑥１６００年
⑧昭和15年10月13日生まれ。学習院大学大学院理学部化学課修士課程卒業。ダウケミカル㈱研究所　山内興業㈱社長　山内神社代表

久松 定智
［ひさまつさだとも］

①伊予国　②伊予松山藩　③久松松平家
④第20代　⑤菅原道真　⑥寛永12年（１６３５）
⑧昭54年３月４日　愛媛大学大学院連合農学研究科　博士課程：Lovisiana State Arthropod Museum 研究員　愛媛大学農学部研究員

立花 宗鑑
［たちばなむねあき］

①筑後国　②柳河藩　③立花家　④第17代
⑤立花宗茂　⑥元和６年（１６２０）再封
⑧昭和12年生まれ。三井物産株式会社、日本ユニシス株式会社を経て、現在は株式会社御花監査役、立花家史料館館長、公益財団法人軽井沢美術文化学院理事。尊敬する人は、立花宗茂公、戸次道雪公。趣味は、ゴルフ、スキー、オペラ。

黒田 長幹
［くろだながもと］

①筑前国　②秋月黒田藩　③黒田家　④第15代
第14代黒田長榮（ながひで）代理
⑤黒田長興　⑥寛永元年（１６２４）　⑦水五
訓（黒田如水より伝わるもの）
⑧昭和43年7月16日　東京大学法学部　コント
ロール・リスウスグループ㈱ディレクター

細川 護光
［ほそかわもりみつ］

①肥後国　②熊本藩　③細川家　④第19代
⑤細川藤孝　⑥寛永9年（１６３２）

伊東 祐
［いとうゆう］

①肥前国　②佐賀藩　③伊東（佐賀伊東本家）
（鍋島本藩　分家）　④第38代
⑤鍋島直茂　伊東家祖は藤原南家　武智麻呂
⑦鳥ノ子帳お壁書　二十一ヶ条
⑧学歴 Master course student MBA（Master
of Business Administration）Graduate shool
of literature University of Sbi
現在　熊本大学大学院 佐々木教授 研究室所
属 研究員　Royal Princess of Rose（CEO）

島津 修久
［しまづのぶひさ］

①薩摩国・大隅国・日向国諸県郡・琉球国　②薩
摩藩　③島津家　④第32代　⑤島津忠久　⑥文治
元年（１１８５）　⑦島津忠良いろは歌　いにし
への道を聞きても唄へてもわが行にせずばかひな
し　など　⑧進取の気性に富む人材の育成に努め
ています。昭和13年2月東京都に生まれる。㈱島
津興業代表取締役会長　（宗）照国神社宮司　元
鹿児島県公安委員会委員長　元鹿児島県経済同友
会代表幹事　（公財）鹿児島奨学会会長　㈳茶道
裏千家淡交会理事・鹿児島支部会長　㈶島津宗家
記念財団代表理事

多久 知明
［たくともあき］

①肥前国　②佐賀藩多久邑　③多久（邑）家
④第16代
⑧昭和36年佐賀県鹿島市城内生まれ。趣味は
作曲、昆虫・生物の生態観察。座右の銘・信条
は、安寧秩序。

盛岡藩［20万石］

作人館

岩手県盛岡市

①

創立年代―慶応元年（１８６５）
創立時の藩主―南部利剛
校訓―有為なる人材の輩出
概要―寛文年間（１６６５）に「御稽古所」として盛岡城下に開設され、武芸教育が主であったので、文化2年（１８０５）、藩主利敬が江戸より儒者下田三蔵を招いて儒学を取り入れ、文武両道の教育が併せ行われるようになった。天保11年（１８４０）藩主利済は「明義堂」という校名をつけ充実した教育を行った。藩主利剛は藩校明義堂の学制改革を行い、文学・武芸・医学・儒学のほかに国学も教科として取り入れ、慶応元年（１８６５）に新たに「作人館」と改称した。

作人館跡

●問い合わせ先
桜山神社内　坂本
TEL：019-622-2061

仙台藩［62万石］

養賢堂

宮城県仙台市

②

創立年代―安永元年（１７７２）
創立時の藩主―伊達重村
校訓―天地は万民を養ひ、聖人は賢を養ひて、以て万民に及ぼす
概要―元文元年（１７３６）５代藩主伊達吉村が、仙台北三番丁に学問所を設置し、藩士の子弟を教育した。７代藩主重村は宝暦10年（１７６０）学問所を北一番丁に移し校舎の拡大をはかり、安永元年（１７７２）「養賢堂」と命名した。文化14年（１８１７）には、二十五間四方、二十五室、三千名を収容する大講堂が落成し、また講堂の東に霊廟が設けられ、蔵版倉・製本所・学寮・穀蔵・剣槍道場・柔術道場が置かれた。養賢堂は、朱子学と礼法を基本とする学科に兵学を加え、更には洋学教育の拡充を図り洋学科も新設された。また、全国で最初の医学校が創設されるなど、多様な分野を網羅する藩校へと発展した。

養賢堂

●問い合わせ先
伊達家伯記念會（だてかはくきねんかい）
〒980-0805 宮城県仙台市青葉区大手町10-23
TEL/FAX：022-213-4840

庄内藩［14万石］

致道館

山形県鶴岡市

③

創立年代―文化2年（1805）
創立時の藩主―酒井忠徳
校訓―国家の御用に立つ人物の育成　文武兼備、人情に達し、時務を知る人物の育成
概要―寛政12年（1800）大宝寺に校地を定め、備前の閑谷学校を参考に享和2年（1802）着工、文化2年（1805）聖廟以下の諸建物を完成した。校名を致道館と名付け、校長にあたる祭酒に白井矢太夫を任命し、同年2月晦日開校した。初期の致道館の教育は成人教育に重点を置き、家中に儒学・軍学の聴講を義務づけたが、文化13年政教一致の目的から致道館を三ノ丸に移してからは、句読所・本舎・外舎などの校舎を増築し、句読所、終日詰、外舎、試舎生などの初等教育から高等教育に至る教科課程を定めた。学風は徂徠学で、自学自習、会業などで個性尊重の英才教育を行った。

史跡旧致道館　聖廟と表御門

●問い合わせ先
史跡旧致道館管理事務室
〒997-0035 山形県鶴岡市馬場町11-45
TEL：0235-23-4672

天童藩［2万3千150石］

養正館

山形県天童市

④

創立年代―文久3年（1863）
創立時の藩主―織田信学
校訓―一、日の計は鶏鳴にあり、鶏鳴に起きざれば、一日空なし。
一、年の計は陽春にあり、陽春に耕さざれば、秋実らず。
一、期の計は幼稚にあり、幼稚に学ばざれば、老いて後悔やむ。
概要―藩主織田家は高畠時代より儒臣武田孫兵衛らに講釈をさせており、天童移転後もたびたび文武奨励を家臣に対して達していた。天童藩に藩校が創立されたのは文久3年（1863）のことであり、養正館と呼ばれた。これは、佐藤重剛が独力で建築し、藩に献納したものであった。慶応元年（1865）の達では、坊主格以上、30歳以下の者は毎日午刻（午前12時）より申刻（午後4時）まで学校に出席することとされ、部屋住の者は終日通学することとされた。教科は四書五経を専務とした。戊辰戦争で焼失したが、明治2年（1869）に学舎が新築され、北隣には幼年者の習字稽古所である筆学所が新設された。

旧東村山郡役所資料館

●問い合わせ先
旧東村山郡役所資料館
〒994-0041 山形県天童市五日町2-4-8
TEL/FAX：023-653-0631

⑤

興譲館（こうじょうかん）

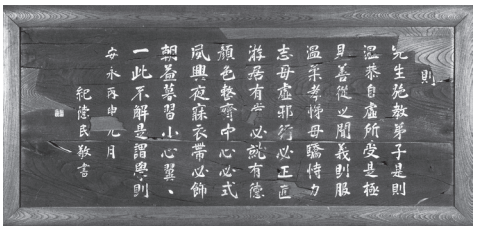
米澤藩（よねざわはん）［15万石］

山形県米沢市

創立年代―安永5年（1776）
創立時の藩主―上杉治憲（鷹山）（うえすぎはるのり・ようざん）
校訓―「興譲」の精神
・自他の生命を尊重する精神
・己を磨き、誠を尽くす精神
・世のために尽くす精神

概要―藩政改革を推進し、米澤藩を再建した上杉治憲（鷹山）が、学問は国を治める根元であるという考えに基づき、現実の政治や経済に役立つ「実学」を根付かせるために、廃れていた学館の再興を図り、細井平洲を招き、藩校「興譲館」を創設した。

校名は「大学」の「一家仁一国興仁、一家譲一国興譲」を由来とし、学則を「管子」弟子職より定め、実学重視に基づき、治国に資するものは、朱子学・陽明学等学派にこだわらず講究し、多数の有為な人材を輩出した。


学則の扁額

●問い合わせ先
山形県立米沢興譲館高等学校
〒992-1443 山形県米沢市大字笹野1101
TEL：0238-38-4741　FAX：0238-38-2531

⑥

講学所（こうがくしょ）

福島藩（ふくしまはん）［3万石］

福島県福島市

創立年代―文政年間（1818～1830）
創立時の藩主―板倉重昌（いたくらしげまさ）

概要―延宝年間、藩主本多恵国により「講習所」が創設されたという。本多家は僅かな期間のみであり、詳細は不明である。元禄15年（1702）に板倉家が信州より転封してくると、文政年間、藩主板倉勝俊により講学所が設置された。これは、烏山藩時代に板倉重矩が創設した藩学を再興したものという。江戸藩邸内にも学問所が設置され、福島および江戸において藩士子弟への教授が行われた。両所では、朱子学を宗とし、四書五経や近思録、孝経・小学を基本とした。明治元年（1868）に陣屋を三河国重原に移し、藩学も重原で創設されることとなった。

福島城大手門跡

湯長谷藩［1万5千石］ ⑦

致道館

福島県いわき市

創立年代―天保14年（1843）
創立時の藩主―内藤政恒
校訓―漢学・和学・剣術・槍術・弓術の学び
概要―致道館は、天保14年（1843）、10代藩主内藤政民の命により、郭内広小路に設立された。藩士右色伝（賢由）、もと磐城平藩藩校侑賢堂助教吉田庸弥（敦和、景雲と号す）が、子弟の教育にあたった。俊英関口愷雄は、17歳にして致道館の助教となった。教科には、漢字・和学・剣術・槍術・柔術があった。明治2年（1869）、命を受けて藩士三好五郎が致道館の機構改革に着手していたが、明治4年廃藩によりそれまでとなった。明治4年の『湯長谷藩録高及び人名』には、吉田庸弥・関口愷雄の名前のみで、三好五郎名は見出せないが、医師三好廉人を五郎にあてる考え方がある。

湯長谷藩館跡

守山藩［2万石］ ⑧

養老館

福島県郡山市

創立年代―宝暦11年（1761）
創立時の藩主―松平頼寛
概要―守山藩は、正庁は江戸大塚に置き、奥陸守山と常陸松川に陣屋を置いた。藩主は江戸城で大学頭となり常駐して、守山陣屋には一度も来ていない。守山陣屋に残る資料で調べたもので、正庁のあった大塚のことや松川陣屋については詳細を欠く。

白河藩［11万石］

福島県白河市

⑨

立教館

創立年代―寛政3年（1791）
創立時の藩主―松平定信
校訓―五倫五常の道をはずさず行末は国の光とみちのくやことばの露も王と
概要―寛政3年（1791）、藩主松平定信が白河城下会津町に立教館を設立した。立教館は久松松平家初代定綱（桑名藩主）が城内に設けた学問所に始まるといわれる。立教館には座学を学ぶ就学館と武芸を学ぶ講武所とがあった。文化6年（1809）焼失、享和元年（1801）規模を拡大して再建。文政6年（1823）松平氏の伊勢国桑名転封とともに立教館も桑名に移った。白河の立教館はかわって入封した阿部氏に引きつがれ、文政8年（1825）5月、藩校修道館として開校された。10歳以上の藩士子弟が文武を兼修した。在町の者でも願い出のうえ修学を許可するとの内規もあった。

立教館跡

●問い合わせ先
公益財団法人 立教志塾
〒961-0951福島県白河市中町6
TEL：0248-23-1427

二本松藩［10万7百石］

福島県二本松市

⑩

敬學館

創立年代―文化14年（1817）
創立時の藩主―丹羽長富
概要―二本松藩は家塾型の藩校であり、文武の各師範宅に藩費で教場が設置され、文学7校、兵学1校、武術13校のあわせて21校があった。文化14年（1817）に創設された「敬學館」は、ここで学ぶ生徒のうち士分以上のものが、定められた日割に従って出席することとなっていた共同学修の場としての文武学館であり、本校と称され、敷地内には武芸所・射的場および手習所が設けられた。就学については藩士の嫡子は10歳から12歳までの3ヵ年、二・三男は願いによって許可したといわれる。現在、「敬學舘圖書章」の蔵書印が押印された合計1千474冊の教科書が残されており、市有形文化財に指定されている。

扁額「敬學」

●問い合わせ先
二本松市教育委員会文化課
TEL：0243-55-5154

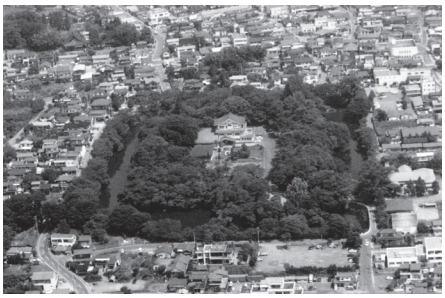
棚倉藩［6万石］

修道館

福島県東白川郡棚倉町

⑪

創立年代―明治2年（1869）
創立時の藩主―阿部正功
概要―「修道館」は白河藩主であった阿部正篤によって創設されたが、慶応3年（1867）の棚倉転封により閉館した。明治2年（1869）に版籍奉還で棚倉藩知事となった阿部正功は、戊辰戦争により疲弊した藩の立て直しを行うために修道館を復興した。教科用書物と学規は白河藩時代と同じであったが、武科を分離して文学を修めさせた。武術等は別施設。教科書は、日本書紀、続日本記、史記評林、漢書評林、後漢書、貞観政要、韓非子解詁全書、戦国策、小学内篇（日新館蔵版小学）、四書五経等。明治4年に廃館。明治5年に藩校跡に修道小学校を建て、明治6年に棚倉小学校と改称する。


棚倉城跡

●問い合わせ先
棚倉町立図書館
〒963-6131
福島県東白川郡棚倉町大字棚倉字新町21-1
TEL：0247-33-4342

水戸藩［35万石］

弘道館

茨城県水戸市

⑫

創立年代―天保12年（1841）
創立時の藩主―徳川斉昭
校訓―神儒一致・忠孝一致・文武一致・学問事業一致・治教一致
概要―第九代藩主徳川斉昭が天保12年（一八四一）に開設（仮開館）。敷地面積は約5万7千坪（17万8千200㎡）と日本最大である。天保8年、斉昭は藤田東湖に命じて建学の趣旨を明示した文章を起草させ、同9年、斉昭の名で「弘道館記」として公表された。諸施設の工事は同12年7月におおむね終了、翌8月1日に仮開式を挙行。本開館式が行われたのは安政4年（1857）である。明治元年（1868）、藩内抗争で文館・武館・医学館など消失（弘道館の戦い）。同5年、学制発布に伴って閉館。消失を免れた学校御殿（正庁）は、同4年から水戸県庁として、同5年から同15年までは茨城県庁として使用された。

弘道館

●問い合わせ先
茨城県水戸土木事務所偕楽園公園課
弘道館事務所
〒310-0011 茨城県水戸市三の丸1-6-29
TEL：029-231-4725　FAX：029-227-7584
E-mail：kodokan@pref.ibaraki.lg.jp

結城藩［1万8千石］

秉彝館

茨城県結城市

⑬

創立年代―天保元年（1830）頃
創立時の藩主―水野勝愛
校訓―忠孝の道を涵養す
概要―結城藩校は天保元年（1830）頃11代藩主水野勝愛により城内三ノ丸に創設され「秉彝館」と称した。初代学頭には同9年（1838）に招聘された猪瀬周助が任じられた。歴代の学頭の過半は朱子学派であり学風も朱子学を宗とするものであった。主に漢字が教授され四書五経の文選の素読より進んで解釈に至り学習進度に伴い一等生から四等生までの等級があった。このほかに普段は職務に従事していた員外生があった。安政6年（1859）に職制強化がなされたがこれは安政期の藩政改革の一環に「秉彝館」が位置していたことを示している。医学館もあったが藩乱の兵火に合い建物及び和漢の書器具諸帳簿等一切を失った。

結城城跡歴史公園（聰敏神社）

●問い合わせ先
小林寿平
〒307-0001 茨城県結城市結城12449
TEL：0296-32-0872

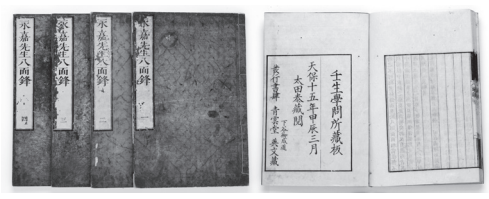
壬生藩［3万石］

学習館

栃木県下都賀郡壬生町

⑭

創立年代―正徳3年（1713）
創立時の藩主―鳥居忠英
校訓―初代鳥居元忠以来「文武共に精出、成徳達材」
概要―正徳2年（1712）に近江国水口から入封した藩主鳥居忠英によって、翌年正月に創設された。藩校〈文武場〉では兵書を冨田覚真に講義させ、また成績優秀な藩士を伊藤東涯の古義堂に入門させ漢籍を研究させた。学風は古学（仁斎学）が重んじられたが、藩主忠挙の弘化3年（1846）、文武藩校を合併し校名を〈学習館〉とし、公式の教義に「朱子学」を併用した。また江戸藩邸に藩校〈自成堂〉を設け、太田熊山（泰蔵）に学頭を命じた。維新後、江戸藩邸内の剣道場を〈学習館〉に併合し、文武館と称して拡張されようとしたが、明治4年（1871）11月の壬生県の廃県により閉鎖された。



壬生藩校出版物

●問い合わせ先
壬生町立歴史民俗資料館
〒321-0225 栃木県下都賀郡壬生町本丸1-8-33
TEL/FAX：0282-82-8544
E-mail：rekimin@town.mibu.tochigi.jp

忍藩［10万石］

進脩館

埼玉県行田市

⑮

創立年代―文政8年（1825）
創立時の藩主―松平忠堯
概要―文政6年（1823）に桑名から転封してきた松平下総守家は、桑名藩時代に設立した藩校進脩館を天保6年（1835）、忍城外郭下荒井の地に再興した。藩儒は文政6年に登用された京学派の波山が重要な役割を担った。藩士子弟は10歳に達したら入学することとされ、儒学（朱子学）・軍学（北条流）は士分以上の必須、算術・習字は御切米以下の者の学科とされた。軍学は士鑑要法を教科書とした。明治元年（1869）9月に藩政改革が実施され、その一環として洋学教官・学監・学開所下役の三役を新たに置くとともに、培根堂・国学館・洋学館が新設された。廃藩置県により廃校となった。

進脩館由来本の「資治通鑑」などは、現在地元の熊谷・浦和両高等学校に保存されている。又、進脩館の扁額は行田市郷土博物館に保存されている。

伝・藩校進脩館表門（旧芳川家表門）

●問い合わせ先
公益財団法人 忍郷友会
〒361-0073 埼玉県行田市行田5-10
スリーハートビル3F
TEL：048-556-9000　FAX：048-556-9007
E-mail：gyoda@oshi-goyukai.or.jp

川越藩［15万石］

講学所（博喩堂）

埼玉県川越市

⑯

創立年代―文政10年（1827）
創立時の藩主―松平斉典
校訓―一、学問は人たるの道を知て是を身に行ひ己を修め人をも治むべき為にてあれば徳行は本なり、文芸は末也と思ふべし。
一、自他共に恭敬を厚くして貴賤長幼の礼法を正しく、仮にも戯虐の言傲慢の行有べからず。
一、学術は孔孟程朱の正脈を崇び守るべし。
概要―　文政10年（1827）設立の講学所は、15～40歳以上の次男、三男までの藩士やその子弟が学び、月3回もしくは6回の講釈が中心であった。また、与力・大役人以下の下級武士までが受講の対象であった。その後、文政12年（1829）には、8歳になると入学し、素読から学べるようになった。

講学所の学問は、宋時代の朱熹などの学問で、実践道徳を唱える漢学が中心であった。また謝礼金などはとらず、一切が藩費で行われた。

川越城　本丸御殿

●問い合わせ先
川越市立博物館
〒350-0053 埼玉県川越市郭町2-30-1
TEL：049-222-5399　FAX：049-222-5396
E-mail：tsubasakan@city.kawagoe.saitama.jp

佐倉藩（さくらはん）［11万石］

成徳書院（せいとくしょいん）

千葉県佐倉市

⑰

創立年代―寛政4年（1792）
創立時の藩主―堀田正順（ほったまさあり）
校訓―朱子「白鹿洞書院掲示」
概要―老中として日本を開国に導いた堀田正睦は、藩政改革の一環として藩校を拡充して「成徳書院」と改め、朱子学を根底にしつつ洋学（蘭学・英学等）を取り入れ、人材を育成した。医学所では順天堂を開いた佐藤泰然らによって西洋医学が教授され、演武場では刀術・砲術等の武芸が教授された。明治維新後は私立学校として存続したが、明治32年に県立中学校となり、戦後の学制改革によって県立佐倉高等学校となった。

佐倉高校記念館／明治43年(1910)落成

●問い合わせ先
千葉県立佐倉高等学校
〒285-0033 千葉県佐倉市鍋山町18
TEL：043-484-1021　FAX：043-486-0903

江戸幕府（えどばくふ）

昌平坂学問所（しょうへいさかがくもんじょ）

東京都文京区

⑱

創立年代―寛政9年（1797）
創立時の藩主―徳川家斉（とくがわなりあき）
概要―徳川5代将軍綱吉は儒学の振興を図るため、元禄3年（1690）、湯島の地に聖堂を創建して上野忍岡の林家私邸にあった廟殿と林家の家塾をここに移し、官学の府としての規模を拡大・整頓した。これが昌平坂学問所（現在の湯島聖堂）の始まりである。その後、およそ百年を経、松平定信の寛政の改革に伴い、文教刷新策として朱子学を正学として振興する政策（寛政異学の禁）により、寛政9年（1797）、幕府直轄学校として、世に名高い昌平坂学問所、通称昌平黌を開設した。明治維新を迎えると聖堂・学問所は新政府の所管するところとなり、当初、学問所は大学校・大学と改称されながら存置されたが、明治4年（1871）これを廃して文部省が置かれることとなり、林羅山以来240年、学問所となってからは75年の儒学の講筵は、ここにその歴史を閉じた。

湯島聖堂

●問い合わせ先
史跡湯島聖堂
公益財団法人 斯文会（史跡湯島聖堂管理団体）
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 湯島聖堂内
TEL：03-3251-4606　FAX：03-3251-4853

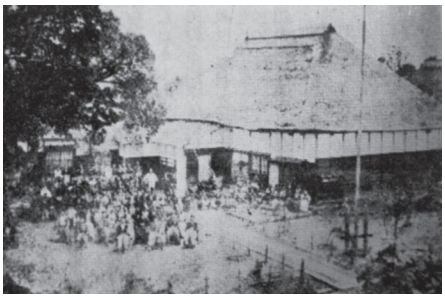
三根山藩（みねやまはん）［1万1千石］ ⑲

入徳館（にゅうとくかん）

新潟県新潟市

創立年代―明治3年（1870）
創立時の藩主―牧野忠泰（まきのただひろ）
校訓―文武両道を兼ね備えた徳のある人を育てる
概要―藩校が創設されたのは天保年間。第9代藩主忠直公は、時代の流れを読み、文武の拡張に意を注ぎ、真心影流の熟達者佐藤茂富や後の家老神戸武正に文武両道を訓導させた。第11代忠泰公は文武館を併合して入徳館と名付け、東伏見宮嘉親王に染毫を願った。創設時の学者は神戸武正・新保正与・佐藤貞三郎等。教育を受けた主な人物として、水戸寅松、山岸徳平、平野秀吉、金子彦二郎、大島秀一、鈴木荘六、豊原道也、小島官吾等。

入徳館は昭和53年学校統合で閉校。今は青少年野外研修場として活用、藩祉は公園となり、藩祉碑、新保碑、豊原碑、米百俵碑等が歴史を伝え見学者も多い。元士族の会である三根山有終団は、それらへの対応や列侯祭や長岡の米百俵祭りへも協力している。


明治期の第28私学峰岡校（旧入徳館）

●問い合わせ先
一般財団法人 三根山有終団
〒953-0075 新潟県新潟市西蒲区峰岡228
TEL：0256-72-3687

長岡藩（ながおかはん）［7万4千石］ ⑳

崇徳館（そうとくかん）

新潟県長岡市

創立年代―文化5年（1808）
創立時の藩主―牧野忠訓（まきのただくに）
概要―長岡藩における藩学の先駆は、宝歴6年（1756）に創設された家老山本老迂斎の家塾「書堂」である。山本没後、文化5年（1808）に忠精により崇徳館が創設された。3代藩主忠辰は実用有用の学を奨励し、山本も古義学を導入するなど、古くから古義学が導入されてきた。崇徳館では、当初、古文辞学派の秋山影山が担当していたが、文化9年に京都古義堂の伊藤東岸が招聘され、両派が名実ともに併存することとなった。天保7年に佐藤一斎門の高野松陰が都講になると、新たに古義学派と朱子学派の併存となった。慶応3年（1867）に古義学派は廃されて朱子学派に統一された。崇徳館は戦乱により焼失してしまうが、明治3年（1870）に国漢学校が新たに創立された。

崇徳館（「長岡城之面影」より）

●問い合わせ先
長岡市立中央図書館
〒940-0041 新潟県長岡市学校町1-2-2
TEL：0258-32-0658

富山藩（とやまはん）［10万石］

廣徳館（こうとくかん）

富山県富山市

㉑

創立年代―安永2年（1773）
創立時の藩主―前田利與（まえだとしとも）
概要―富山藩学は、2代藩主前田正甫の代に学統が確立した。安永2年（1773）6月、藩主利與の強い指導で藩校を設立し廣徳館と名づけた。利與は士風の振興のためには学問文教を興すに如くはなしと、強い決意で藩校設立を実現させた。

廣徳館は富山城内総曲輪の地に建てられた。文化7年（1810）校舎が総曲輪から三ノ丸西に移築された。明治元年（1868）9月廣徳館は火災で焼失したが、民家を借りて継続した。翌2年廣徳館を藩学校と改称して富山二番町に移転し、また総曲輪の民間の邸宅に分校を設置して、一般町人の入学を許した。藩学校は明治4年の廃藩とともに廃止された。

廣徳館孔子像

●問い合わせ先
富山廣徳塾
〒930-0138 富山県富山市呉羽3477
TEL：076-463-5881　FAX：076-258-3191

岩村藩（いわむらはん）［3万石］

知新館（ちしんかん）

岐阜県恵那市

㉒

創立年代―元禄15年（1702）
創立時の藩主―松平乗紀（まつだいらのりただ）
概要―元禄15年（1702）、信州小諸藩から移封された松平乗紀は、直ちに岩村に文武所を設立した（享保4年説もある）。文武所はのちに知新館と改称された。藩学上で岩村藩から輩出した人物に林術斎と佐藤一斎がいる。述斎は藩主乗薀の三男として生まれ、寛政5年（1793）に林家へ養子入りした。一斎は家老の家に生まれ、同年に林家に入門し、昌平黌の塾頭にまでになった。藩主乗美の時には家臣の一人に加えられ、藩主には「御心得向存意」、重臣には「重職心得箇条」を書き与えている。

現在は、当時の藩校門（県指定文化財）のみ残っているが、4月上旬に孔子祭（釈奠の儀）が厳粛に執り行われている。

紅葉の知新館

●問い合わせ先
佐藤一斎顕彰会
〒509-7403 岐阜県恵那市岩村町1657-1
岩村コミュニティーセンター内
TEL：0573-43-3722

田中藩（たなかはん）［4万石］

日知館（にっちかん）

静岡県藤枝市

㉓

創立年代―天保8年（1837）
創立時の藩主―本多正寛（ほんだまさひろ）
校訓―「論語、子張」子夏曰「日知其所亡月亡忘其所能　可謂好学已矣」に基づく（日に月に自分の未知なことを知ることに努め、知りえたことを忘れないようにする事こそ学問を好むもの言える）
概要―藩主本多正意の代に田中藩教学の振興がなされた。天保5年（1834）、藩政改革の一環として、藩主正寛により学問所および諸稽古所が設立され、同8年には日知館が創立された。弘化4年（1847）に折衷学に学統が改変された。当初、日知館では武に重点が置かれ、多くの武術指導が行われた。万延元年（1860）には芳野の建言により、江戸藩邸にも日知館が創設された。

田中城下屋敷跡

●問い合わせ先
田中藩・長尾藩研究会
〒426-0082 静岡県藤枝市瀬古2-12-14
TEL：054-641-1748

桑名藩（くわなはん）［11万石］

立教館（りっきょうかん）

三重県桑名市

㉔

創立年代―寛永12年（1635）
創立時の藩主―松平定綱（まつだいらさだつな）
概要―松平定綱が美濃大垣から寛永12年（1635）に桑名に移った際に、学問所を城内朝日丸に設けたことを起源とする。その後子孫は越後高田・奥州白河と移り、松平定信の時代に大幅に拡張され、立教館と称した。文政6年（1823）、再び桑名へ移封となると桑名伊賀町へ移った。学風は朱子学を遵奉し、学問・武芸・習書・数字・容儀・舞楽等を教授した。9歳までの藩の子弟は藩校に入り、童蒙訓を学んだ後、15歳になると武術を一課修めることとされていた（柔道必須）。幕末期で生徒の人数は200名ほどであり、江戸の上屋敷や分領である越後柏崎にも学校が設けられていた。

立教小学校（立教館の名称を継承）

●問い合わせ先
桑名市博物館
〒511-0039 三重県桑名市京町37-1
TEL：0594-21-3171

明倫館（めいりんかん）

田辺藩（たなべはん）［3万5千石］

京都府舞鶴市

㉕

創立年代―天明年間（1781～1788）
創立時の藩主―牧野宣成（まきのふさしげ）
校訓―①進取（先取）何事も進んでせよ
②自治　自分のことは自分でせよ
③協同　互いに助けあへ
概要―田辺藩学問所の設立年月は不詳ながら、第3代藩主英成の折文教の始りと言われている。天明年間（1781～88）第6代藩主宣成の折初て城内に「明倫斎」を築き、御牧忠蔵を招聘し主に崎門学派の朱子学を講ぜしめた。ついで浅見絅斎門下の岡田貞治、忠蔵の子御牧柔次郎らが儒員となり闇斎学は隆盛をみた。安政4年（1857）野田苗浦が抜擢され文教進展の道が固められる。文久年間（1861～63）第9代藩主誠成のとき学舎は増改築され「明倫館」と改称。藩士水谷寒水を儒官に迎えて三上是庵を招聘し、漢学の他洋学医学なども講じられ、遊学する際には、藩賞を支給して学問を奨励した。そして時代の最先端を極める人材を各分野において輩出した。

明倫館正門

●問い合わせ先
田辺城資料館
〒624-0853 京都府舞鶴市字西田辺15-22
TEL：0773-76-7211

敬業堂（けいぎょうどう）

峰山藩（みねやまはん）［1万1千石］

京都府京丹後市

㉖

創立年代―文政末年
創立時の藩主―京極高備（きょうごくたかまさ）
校訓―学業を尊重し、友と和合することに努めさせる
概要―文化期（1804～18）以前より、読書手跡稽古場と称する藩士子弟を教授する施設があり、のちに敬業堂と呼ばれるようになった。藩学として整備されたのは、藩主京極高備の文政末年ころであった。当初、藩士子弟は家塾などで修学することも許されたが、明治維新前より、男子は必ず敬業堂へ入学することとされた。慶応から明治にかけて、藩士糸井兼厚により学制が刷新され、専門の教師が置かれることとなった。明治初年には敬業堂内に欧学校が設置され、壮年で有志の者を入学させている。跡地には現在峰山小学校が建っている。

昭和初期の峰山小学校（敬業堂跡地）

●問い合わせ先
相光寺
〒627-0011 京都府京丹後市峰山町丹波1344
TEL：0772-62-1926

紀州藩［55万5千石］

学習館

和歌山県和歌山市

㉗

創立年代―正徳3年（1713）
創立時の藩主―徳川吉宗
校訓―和漢課目の学業成り、旁宇内の体勢に通ずる者は、猶徳行を考へ、道芸を察し、秘書寮に入れ、国事に可任を弁し、之を政府に達すべし
概要―紀州藩5代藩主徳川吉宗（1684～1751、のち8代将軍）は、正徳3年（1713）湊御用屋敷明地（現在の湊紺屋町あたり）に学問所として「講釈所」を設立した。この時期の設置は、全国的に見ても比較的早い時期のことであった。儒学の振興を目的としてつくられた機関であったため一般庶民の聴講が許されており、講義によっては170～180人の聴衆が集まったとされる。「講釈所」は後に「講堂」と名称が変更され、組織の充実がはかられたが、次第に衰退していった。荒廃した「講堂」は、10代藩主徳川治宝（1771～1853）の命によって改修増築され、寛政3年（1791）に「学習館」として再生した。また治宝は江戸藩邸に「明教館」、伊勢松阪城に「松阪学校」を創設した。しかし、「学習館」は藩政改革のための人材育成を目的としてつくられたため、庶民は入学できなかった。和歌山大学には「学習館」の蔵書の一部が「紀州藩文庫」として伝来しており、そこで行なわれた教育の一端を窺うことができる。

学習館全図

●問い合わせ先
和歌山大学紀州経済史文化史研究所
〒640-8441 和歌山県和歌山市栄谷930
TEL：073-457-7891

備中松山藩［5万石］

有終館

岡山県高梁市

㉘

創立年代―延享3年（1746）
創立時の藩主―板倉勝澄
校訓―藩士の教育。藩士は官僚も兼ねるので、学問、武術が必要であった。時代によって盛衰はあったが、7代勝静（幕末時老中）が藩主となり、文武両道を厳命し隆盛となった。山田方谷が学頭のとき、名実ともに藩校教育の華を咲かせる。
概要―松山藩4代板倉勝政のとき、藩校として設立。学頭慮田北溟に下問、慮田「有終」「日和」の2案を提出し、勝政は「有終」を選び、「有終館」と命名。創設の意図は藩士教育にあった。時代によって盛衰はあったが、7代勝静（幕末時老中）が藩主となり文武両道を厳命し隆盛となった。山田方谷が学頭のとき、名実ともに藩校教育の華を咲かせる。教育内容は学科は四書五経、十八史略、大日本史、十三経、二十二史、資治通鑑、宋元通鑑、諸子文集など、漢字を主とし、傍々日本歴史も習得。剣、槍、弓、馬、砲術の武道教育も行った。

高梁高校有終館跡

●問い合わせ先
岡山県立高梁高等学校
〒716-0004 岡山県高梁市内山下38
TEL：0866-22-3047　FAX：0866-22-3049

新見藩［1万8千石］

思誠館

岡山県新見市

㉙

創立年代―宝暦5年正月（1755）
創立時の藩主―関政富
校訓―「誠は天の道なり、思誠は人の道なり、至誠にして動かざるもの未だこれあらざるなり」これは孟子の言葉である。思誠ということばは、中国の古い本にも、「人の道を踏み行くためには、至誠の人であらねばならぬ」とあることより名づけられている。
概要―元禄10年、津山森家断絶で新見藩創立になり、僅か4、5年で新たに新見のまちをつくる中で、初代藩主関長治侯の巨腕で統一され、積極壮大なる世帯の切盛は、藩士以下総ての階級に希望を以って努力すべき好機を与えた。延享3年頃より前代未門の風水害が多発した。3代藩主政富侯は、藩士以下の消費生活のあえぎを如何に救済するべきかと悩み、道義的倫理の世界への欲求から、教育に目を向け思誠館を創設した。5代藩主関長誠侯により思誠館の督学をして丸川松隠が招聘され、現在新見市立思誠学校に継承されている。

創立当時の思誠館再現図

●問い合わせ先
関重爾史会（せきえにしかい）
〒718-0011 岡山県新見市新見885 津国屋内
TEL：0867-72-2045　FAX：0867-72-8853

備前岡山藩［31万5千石］

閑谷学校

岡山県備前市

㉚

創立年代―寛文10年（1670）
創立時の藩主―池田光政
校訓―「閑谷入学之者、礼儀正可学問」等
概要―寛文10年（1670）、岡山藩主池田光政が儒学に基づく士庶共学の教育を目指して、閑静な山と谷に囲まれた閑谷の地に学校を開いた。以来、昭和の中期まで苦難と変転を繰り返して連綿と学灯を守り継いで来た。国宝の講堂をはじめ、儒学の祖孔子を祀る聖廟、創立藩主である池田光政を祭る閑谷神社、それらの建造物はほとんどが重要文化財に指定されている。四季折々に彩りを変える四周の自然、茶褐色の備前焼き瓦と白壁のコントラスト、学校の周囲をめぐる石塀など学校建築物としての域を超えて、自然と文化が織りなす学びの原郷と言っても過言ではない。

閑谷学校講堂

●問い合わせ先
公益財団法人 特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会
〒705-0036 岡山県備前市閑谷784
TEL：0869-67-1427　FAX：0869-67-1645
E-mail：hozonkai@shizutani.jp

福山藩（ふくやまはん）［11万石］

福山誠之館（ふくやませいしかん）

広島県福山市

㉛

創立年代―安政2年（1855）
創立時の藩主―阿部正弘（あべまさひろ）
校訓―誠は天の道なり
概要―福山藩の最初の藩校は弘道館といい、4代藩主正倫によって天明6年（1786）福山西町西堀端に建設され、武士を対象に漢字中心の講義がなされた。文政初年、江戸藩邸に丸山学問所を設立。老中筆頭7代藩主正弘は、内憂外患の危機に対処できる人材育成を企図し、安政元年（1854）江戸藩邸内に、続いて福山西町道三口に弘道館を発展的に解消して誠之館を建設し翌年開館した。学堂を中央に習書寮・講武館を配し、漢字・国学・洋学・医学・数学・軍法・武芸などを課し、文武の教育にあたらせた。明治元年（1868）庶民の入学を許す。同2年分校、同3年普通科・女学校を設立し教育の普及に努める。同5年廃校。

福山誠之館記念館

●問い合わせ先
広島県立福山誠之館高等学校
〒720-0082 広島県福山市木之庄町6-11-1
TEL：084-922-0085　FAX：084-922-0088

岩国藩（いわくにはん）［6万石］

養老館（ようろうかん）

山口県岩国市

㉜

創立年代―弘化4年（1844）
創立時の藩主―吉川経幹（きっかわつねまさ）
校訓―文武両道
概要―弘化元年（1844）、12代藩主となった吉川経幹は、明敏の資質あり、幼時より深く文事を愛し、早くから人材養成の必要性を説き、弘化2年、萩の明倫館の規模にならって、学校建設を命じた。弘化3年6月起工式を行い、翌4年5月に開校式を行い、藩校名を養老館とした。館内には聖廟を置き、孔子の像を祭って釈典の礼を行い、養老の典をあげた。養老館には、本門、番所、中門、講堂、聖廟、書庫などのほかに諸生寮、馬場、弓術場、槍術場、剣術場などがあり、文武併置の学館であった。
　慶応2年（1866）、館内より出火し、本堂以下建物の大半を消失し、学校は廃止となったが、明治4年（1871）、養老館の系譜を汲む岩国学校が創立され、「日本の電気の父」とも称される藤岡市助や文豪・国木田独歩、作家・宇野千代などが学んだ。

養老館の門

●問い合わせ先
山口県立岩国高等学校
〒741-0082 山口県岩国市川西4-6-1
TEL：0827-43-1141　FAX：0827-44-1142

高松藩（たかまつはん）［12万石］

講道館（こうどうかん）

香川県高松市

㉝

創立年代―元禄15年（1702）
創立時の藩主―松平頼常（まつだいらよりつね）
概要―寛文九藩校講堂は元禄15年（1702）に城下中野天満宮南に設置。家臣の子弟や領民の中から有能なものに対し、藩儒十河順安・根本弥右衛門が儒学を講じた。享保年間（1716～36）に一時廃止されたが、元文2年（1737）に復興。安永8年（1779）に中野天満宮北に講堂に倍する規模の講道館を建て、藩士やその子弟に毎月六回経書を学ばせた。講道館には総裁を置いた。初代の総裁は後藤芝山で、その門弟柴野栗山は幕府の儒官となった。慶応元年（1865）講道館中に洋学校を設けた。廃藩置県後、廃止。高松市番町五丁目香川大学教育学部附属高松小学校構内には、藩校構内に聖廟を建立した記念碑である「新建大聖廟記」（天保3年建立）がある。

高松城艮櫓と中濠

●問い合わせ先
高松市教育委員会
〒760-8571 香川県高松市番町1-8-15

丸亀藩（まるがめはん）［5万1千石］

明倫館（めいりんかん）

香川県丸亀市

㉞

創立年代―寛政6年（1794）
創立時の藩主―京極高中（きょうごくたかなか）
概要―寛政7年（1795）に藩校正明館が設立されたといわれているが、すでに、安永5年（1776）に正明館の名がみえる。正明館は一番丁の東に置かれ、孔子堂も併設した。寛政9年には藩主高中みずから「明倫」と書した扁学を掲げた。のち文政ころ儒臣加藤梅崖・岩村半右衛門・中主膳らによって拡張されて藩校の体制を整えた。教科は、皇学・漢字・習字・弓馬などであった。
　明治元年（1868）7月にこれまでの正明館を改めて請文所とし、新たに習武所を置き、これらを明倫館と称した。16歳から37歳までの藩士の文武両道の充実を置き、これらを明倫館と称した。16歳から37歳までの藩士の文武両道の充実をはかろうとした。

藩校に掲げていた明倫扁額（丸亀市指定文化財）

●問い合わせ先
丸亀市役所文化観光課
〒763-8501 香川県丸亀市大手町2-3-1
TEL：0877-24-8816　FAX：0877-24-8863

伊予松山藩［15万石］

㉟

明教館

愛媛県松山市

創立年代―文政11年（1828）
創立時の藩主―松平定通
校訓―自律・協同・創造（松山東高校）
概要―松平定信の甥として訓育を受け、自らも朱子学を修め、若くして賢君の誉れの高かった定通が、士道の衰えを憂えて綱紀粛正をはかり、徒士以上の藩士の教育のために設けた。校名の由来は司馬遷『史記』蘇秦伝、または劉向『戦国策』の魏策からといわれている。『寡人不肖、未嘗得聞明教』。創立時は日下白巌、高橋復斎が教授、他に助教が4名。朱子学、『史書』『五経』『小学』『近思録』が会講された。館より秋山好古、内藤鳴雪が出る。
　明治以降『松山英学所』『松山中学校』『松山東高校』に継承性がみられる。

明教館外観

●問い合わせ先
愛媛県立松山東高等学校
〒790-8521 愛媛県松山市持田町2-2-12
TEL：089-943-0187　FAX：089-934-5766

宇和島藩［10万石］

㊱

明倫館

愛媛県宇和島市

創立年代―寛延元年（1748）
創立時の藩主―伊達村候
概要―5代村候が寛延元年（1748）、安藤陽州を儒臣として録百五十石を以て聘用し、堀端に藩学「内徳館」を創立したことに始まる。寛政6年（1794）、6代村壽のとき「敷教館」と改称されて前代に引き続いて文教の奨励が行われた。当時の通達によれば「素読も9歳以上は怠りなく出席すべきこと」とある。
　文政2年（1819）「明倫館」と改称され、8代宗城は国学に加え蘭学、蘭医学を奨励し高野長英、村田蔵六を招いて西洋兵書の翻訳と蘭学教授にあたらせた。和・漢・洋・兵の四科を置いたが明治4年で廃校となった。以後、明治19年9代宗徳が東京に旧藩内優秀子弟に奨学貸費制度を設けた寄宿寮「伊達明倫館」を創立。「南豫奨学会・明倫館」として現在に至っている。

明倫館外観

●問い合わせ先
伊達事務所
〒798-0061 愛媛県宇和島市御殿町9-9
TEL：0895-22-0034

土佐藩［49万石］

教授館（致道館）

高知県高知市

37

創立年代―宝暦10年（1760）
創立時の藩主―山内豊敷
概要―8代藩主山内豊敷は儒学を尊崇し、家中藩士の講学のため亨保17年（1732）高知北会所に会所講を創め、宮地静軒・中村七友斎・岡立哲・谷塊斎の四人を講師とした。ついで宝歴10年（1760）、藩校教授館を土佐郡追手筋の地に創設した。藩主豊範の時、文久2年（1862）教授館を廃し、文武総合の広大な藩校致道館を城下西弘小路に建営し経学・史学・国学・句読・槍術・剣術・弓術・砲術・士官学・生兵学・練兵・馬術・居合術・体術・貝太鼓などの諸科目を立て、藩士子弟は13歳より入学して必ず文武を兼修させることにした。この時期より、学校は国家の人材を教育し、世道を維持する重要機関と観じ、また陽明学を公認した。土佐藩学に長い伝統を固持してきた開斎派朱子学風から脱却し新風を導入した。

致道館表門

●問い合わせ先
公益財団法人 高知県スポーツ振興財団
高知県立武道館
〒780-0850 高知県高知市丸ノ内1-8-3
TEL：088-825-1271　FAX：088-825-1274

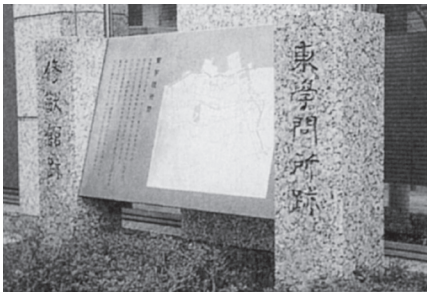
福岡藩［52万6千石］

修猷館

福岡県福岡市

38

創立年代―天明4年（1784）
創立時の藩主―黒田斎隆
概要―天明4年（1784）、城の東西に両学問所を開校。東学問所修猷館は赤坂門に置かれ、藩儒筆頭の竹田定良を館長とし、西学問所甘棠館は唐人町に置かれ、布衣から抜擢された儒医の亀井南冥を館長とした。本藩のように学派を異にする両学館を建て学生に自由選択させた例は他にない。寛政4年（1792）寛政異学の禁の余波が及び、南冥は廃黜の身となり、訓導江上源蔵が館長代理をしたが、同10年類火焼失を機に甘棠館は廃校となり、学生は修猷館に転校させられた。開館当時600人の修猷館生はここに900人となり、またこの年武道場をも設けた。廃藩で廃校となるが、金子堅太郎をはじめ幾多の人材を輩出した。



藩校修猷館跡

●問い合わせ先
福岡県立修猷館高等学校
〒814-0002 福岡県福岡市早良区西新6-1-10
TEL：092-821-0733　FAX：092-822-6564

柳河藩［10万9千647石］

傳習館

福岡県柳川市

39

創立年代―文政7年（1824）
創立時の藩主―立花鑑賢
概要―藩校に先立つものとしては、安東省菴以来藩の儒官を勤めた安東家の弘道館、および横地家の麗沢館があった。7代藩主立花鑑徹通は省菴の曾孫間庵に対し、邸内に文学の講堂並びに聖堂を建て、藩士子弟の教育を行うよう命じた。文政7年（1824）9代藩主鑑賢のとき、藩校伝習館が開かれた。生徒数は普通150名ほどである。教科は朱子学による漢籍の学習と小笠原流の礼法習得、武術は各自師匠を選んで修行したが、一体に武芸尊重の気風が強かった。明治元年（1868）2月には藩校を一旦閉鎖したが、翌年には藩校を復活させ、これを文武館と称した。藩校伝習館の遺阯は元の柳川消防署（柳川市本署）付近である。

伝習館孔子像

●問い合わせ先
福岡県立伝習館高等学校
〒832-0045 福岡県柳川市本町142
TEL：0944-73-3116

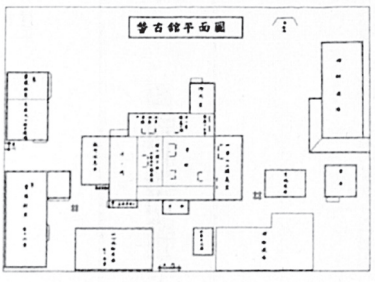
秋月黒田藩［5万石］

稽古館

福岡県朝倉市

40

創立年代―安永4年（1775）
創立時の藩主―黒田長堅
校訓―孝弟　忠信　礼儀　廉恥
概要―安永4年（1775）、藩主長堅が城下町新小路に学校を設けて稽古亭と称した。天明4年（1784）、武芸所を併置して稽古館とあらためられた。文化7年（1810）再建のときに稽古館とあらためられた。藩主の長舒は文武の奨励につとめ、天明5年には福岡の亀井南冥門下の原震平を教授に任じ、徂徠学が大いに振るった。しかし寛政異学の禁の影響は秋月藩にも及び、福岡から朱子学派の儒臣が招かれて講じたり、寛政4年（1792）には京都から闇斎学派の小川晋斎が招かれたりした。文化10年、藩主長韶はもっぱら宋学を明示、福岡から井上学圃を招いて宋学を普及させた。以後学館は福岡藩藩校修猷館の影響下、まったく宋学に統一され、明治藩廃までつづいた。



稽古館平面図

●問い合わせ先
特例財団法人 秋月郷土館
〒838-0011 福岡県朝倉市秋月野鳥532-2
TEL：0946-25-0405

豊津藩（旧小倉藩）［15万5千石］——㊶

育徳館（思永館）

福岡県京都郡みやこ町

創立年代—宝暦8年（1758）小倉藩主・小笠原忠総は朱子学者・石川麟洲の邸内に学問所を設け思永斎と称した。これが藩校の起源である。その後、思永斎を拡張して思永館と改めた。幕末、長州勢の小倉城攻略によって藩庁は小倉から田川郡香春町に移った。その後、明治3年（1870）に藩庁は仲津郡（京都郡）豊津に移り、豊津藩と称した。これを機に藩校名も育徳館と改称し、新築された。育徳館は時代の要請に応じ、洋学等も取り入れた教育がなされた。藩校教育はその後、豊津中学校、豊津高校に継承され平成19年（2007）、校名が豊津高校から育徳館高校へと校名変更がなされ藩校名が復活。現在、中高一貫教育校として創立256周年を迎えている。

創立時の藩主—小笠原忠総

校訓—育徳

概要—宝暦8年（1758）小倉藩主・小笠原忠総は朱子学者・石川麟洲の邸内に学問所を設け思永斎と称した。これが藩校の起源である。その後、思永斎を拡張して思永館と改めた。幕末、長州勢の小倉城攻略によって藩庁は小倉から田川郡香春町に移った。その後、明治3年（1870）に藩庁は仲津郡（京都郡）豊津に移り、豊津藩と称した。これを機に藩校名も育徳館と改称し、新築された。育徳館は時代の要請に応じ、洋学等も取り入れた教育がなされた。藩校教育はその後、豊津中学校、豊津高校に継承され平成19年（2007）、校名が豊津高校から育徳館高校へと校名変更がなされ藩校名が復活。現在、中高一貫教育校として創立256周年を迎えている。

黒門

●問い合わせ先

福岡県立育徳館高等学校

〒824-0121 福岡県京都郡みやこ町豊津973

TEL：0930-23-2003　FAX：0930-33-5037

佐賀藩［35万7千石］——㊷

弘道館

佐賀県佐賀市

創立年代—宝永5年（1708）鍋島光茂の代に城内鬼丸に聖堂を建立、綱茂は宝永5年（1708）聖堂内に講堂を設け藩士の学問所とし、天縦殿と称した。治茂は天明元年（1781）城下松原小路に学校を設立、弘道館と号した天保元年（1830）直正が入国して治世にあたるや、弘道館を大いに奨励した。直正は弘道館の学事奨励による士風の刷新と人材の養成によって推進するため、天保10年弘道館を大手前の北掘端に拡張し、校舎の大改築を行い翌年完成した。その規模は従前に数倍し、本館外に講堂・内生寮・外生寮・蒙養舎を備えており、武芸場も付置した。ここに全国有数の一大藩校が現出し、かくて藩士の総教育体制が進み幕末を迎えた。

創立時の藩主—鍋島綱茂

校訓—弘道館稽古上の心得（天明元年）

概要—鍋島光茂の代に城内鬼丸に聖堂を建立、綱茂は宝永5年（1708）聖堂内に講堂を設け藩士の学問所とし、天縦殿と称した。治茂は天明元年（1781）城下松原小路に学校を設立、弘道館と号した天保元年（1830）直正が入国して治世にあたるや、弘道館を大いに奨励した。直正は弘道館の学事奨励による士風の刷新と人材の養成によって推進するため、天保10年弘道館を大手前の北掘端に拡張し、校舎の大改築を行い翌年完成した。その規模は従前に数倍し、本館外に講堂・内生寮・外生寮・蒙養舎を備えており、武芸場も付置した。ここに全国有数の一大藩校が現出し、かくて藩士の総教育体制が進み幕末を迎えた。

弘道館記念碑

●問い合わせ先

佐賀県立致遠館高等学校

〒849-0915 佐賀県佐賀市兵庫町大字藤木1092-1

TEL：0952-33-0401　FAX：0952-34-1041

佐賀藩多久邑［8千600石］——㊸

東原庠舎

佐賀県多久市

創立年代—元禄12年（1699）
創立時の藩主—多久茂文
概要—東原庠舎は元禄12年（1699）多久茂文が建てた学校で、学問所の初代教授となる川浪自安の屋敷に併設されたのが始まりである。明治2年（1869）校名を多久郷学校と変えるまでの170年、多久の人材育成の根幹をなした。当時としては珍しく、武士の身分でなくても学ぶことができた。学校名は現在、東原庠舎に統一されているが、「鶴山書院」の名称や「東原精舎」の文字が用いられていた。

多久家家臣の子弟は8歳より25歳までを学齢と定め、篤疾がない限り義務付けられ、文武両道を掲げ、一定の単位修得ができなければ家督相続ができないというきびしいものであったが、卒以下の身分にはその規定がなく、入退学は自由であった。

東原庠舎学制 巻子本

●問い合わせ先
公益財団法人 孔子の里
〒846-0031 佐賀県多久市多久町1843-3 東原庠舎内
TEL：0952-75-5112　FAX：0952-75-5320
E-mail：ko-si@po.taku.ne.jp

鹿島藩［2万石］——㊹

弘文館

佐賀県鹿島市

創立年代—寛文9年（1669）
創立時の藩主—鍋島直條
概要—鹿島藩における藩校は、寛文9年（1669）、4代藩主直條が城内に設けた読書のための室「睡足舎」（後の「養花堂」）が始まりとされる。その後の藩主も直條の学問尊重の精神を受け継ぎ、8代藩主直宜は、寛政元年（1789）、本藩より古賀精里を招いて経義を講じ、精里は校名を「徳譲館」とした。13代藩主直彬は、安政6年（1859）、藩校の改革を行い、「徳譲館」を「弘文館」と改称。教科内容は、和学・漢学・医学・洋学・算法・筆道・習礼および諸武芸で、毎月2回の内試と春秋2期の会試があった。明治3年（1870）、弘文天皇の諡号に配慮し、「鏘造館」と改称したが、翌年、鹿島県が廃止されるにあたって、廃校となった。

鹿島城赤門

●問い合わせ先
鹿島市総務部企画財政課
〒849-1312 佐賀県鹿島市大字納富分2643-1
TEL：0954-63-2114　FAX：0954-63-2129

平戸藩［6万3千石］

維新館

長崎県平戸市

㊺

創立年代―安永8年（1779）
創立時の藩主―松浦清（静山）
概要―校名は、『孟子』の尽心章から―「孟子曰く、文王を待ちて後に興る者は凡民なり。夫の豪傑の士の如きは、文王無しと雖も猶は興る。」に由来する。（自立自発）

江戸中期に創設の平戸藩校維新館が、明治13年に第37代御当主の松浦章公により猶興書院（私学）として新たにスタート。戦前の県立中学猶興館を経て、戦後の昭和23年に新制の県立猶興館高等学校として再スタートし、現在に至っている。今年で134年目を迎えた、長崎県下最古を誇る『文武両道』を校是とした伝統校である。

現在、普通科及び理数科併せ全14クラスだが、少子化に伴う改革策が課題の一つ。同窓生は約2万8千名を数え、中には『大日本商業史』を著した菅沼貞風や数々の流行歌を作詞した藤浦洸（詩人）、日本画家で名高い黒崎芳人黒崎義介などがいる。

●問い合わせ先
長崎県立猶興館高等学校
〒859-5121 長崎県平戸市岩の上町1443
TEL：0950-22-3117

熊本藩［54万石］

時習館

熊本県熊本市

㊻

創立年代―宝暦5年（1755）
創立時の藩主―細川重賢
校訓―初代教授 秋山玉山が定めた「時習館学規」がある
概要―宝歴4年（1754）12月、藩政改革の一環で8代将軍藩主細川重賢が熊本城内の二ノ丸に設立、学寮を時習館、武芸所を東樹・西樹と称した。同5年正月、重賢臨席のもとに開校。時習館は当初より藩士の子弟のみならず庶民でも好学の者には門戸を開いた。その学風は朱子学を専一にせず古学も併せ容れた。その撰になる『時習館学規』では学科は古義新註をならび用いることをのべた。時習館の盛名は広く全国に及び、その教育・学政のあり方は他藩に大きな影響を与えた。幕末維新期の時習館は一藩の大勢を占めた保守派（学校党）の本拠として実学党や勤王党に対立、明治3年（1870）実学党が藩政を掌握すると時習館は廃止され、代わって洋学校が再建された。

時習館跡

●問い合わせ先
肥後時習館顕彰会
〒860-0046 熊本県熊本市横手3-13-14 中村方
TEL：096-352-7801　FAX：096-352-7801

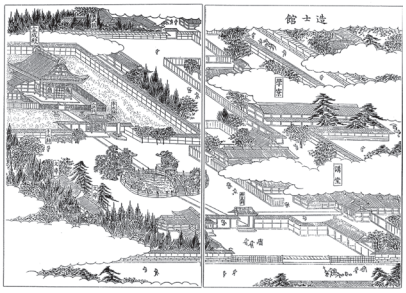
薩摩藩［77万石］

造士館

鹿児島県鹿児島市

47

創立年代―安永2年（1773）
創立時の藩主―島津重豪
校訓―修身斎家治国平天下
概要―8代藩主島津重豪は文教面に積極的方針をとり、城内二ノ丸御門前3千400余坪の地に聖堂（宣成殿）を中心に講堂・学寮・文庫などからなる壮大な学校造士館を建営し、これに隣接する4千139坪の地に稽古場演武館を設けた。翌4年廓内に医学院を設けて漢医学を講習させ、同8年吉野村に薬園を設け、また明時館を府城東南の地に営んで天文学を研究させた。嘉永4年（1851）藩主斎彬が襲封するに及び教育改革を断行、学校教育は一大発展をした。維新ののち明治2年（1869）造士館学制を改めて国学・漢学・洋学の三局にまとめ、翌3年には別に小学校を新設。同4年廃藩により本学校は廃されたが、造士館は明治維新の大業に参画した多くの人材を輩出する淵叢となった。



造士館

●問い合わせ先
造士館講座運営委員会事務局
〒890-0024 鹿児島県鹿児島市明和1-40-13
TEL：090-5737-5571　FAX：099-281-9258

吉田藩［7万石］

時習館

愛知県豊橋市

48

創立年代―宝暦2年（1752）
創立時の藩主―松平信復
概要―藩校時習館は、遠江浜松から吉田へ入封した藩主松平信復によって宝暦2年（1752）7月、城下八丁小路沿いの武家屋敷敷地内（豊橋市八丁通）に創設された。同時に、教育の基準ともなるべき時習館定十一カ条が出されている。その後、老中として幕閣で活躍した藩主信明が文化3年（1806）に時習館規条を制定し、藩校教育の目標と教育の具体的内容を示して教育の刷新をはかった。また、弘化元年（1844）6月には、御目付触れで特に藩校における武芸教育の必要性とその内容が示されている。さらに幕末・維新期には内外の緊迫した情勢を反映して藩校の充実・強化がはかられている。

藩校時習館跡の石碑（現豊橋公会堂）

●問い合わせ先
愛知県立時習館高等学校
〒441-8064 愛知県豊橋市富本町
TEL：0532-45-3171　FAX：0532-47-7544

No.	藩名	藩校名	所在地
①	盛岡藩	作人館	岩手県盛岡市
②	仙台藩	養賢堂	宮城県仙台市
③	庄内藩	致道館	山形県鶴岡市
④	天童藩	養正館	山形県天童市
⑤	米澤藩	興譲館	山形県米沢市
⑥	福島藩	講学所	福島県福島市
⑦	湯長谷藩	致道館	福島県いわき市
⑧	守山藩	養老館	福島県郡山市
⑨	白河藩	立教館	福島県白河市
⑩	二本松藩	敬學館	福島県二本松市
⑪	棚倉藩	修道館	福島県東白川郡棚倉町
⑫	水戸藩	弘道館	茨城県水戸市
⑬	結城藩	秉彝館	茨城県結城市
⑭	壬生藩	学習館	栃木県下都賀郡壬生町
⑮	忍藩	進脩館	埼玉県行田市
⑯	川越藩	講学所(博喩堂)	埼玉県川越市
⑰	佐倉藩	成徳書院	千葉県佐倉市
⑱	江戸幕府	昌平坂学問所	東京都文京区
⑲	三根山藩	入徳館	新潟県新潟市
⑳	長岡藩	崇徳館	新潟県長岡市
㉑	富山藩	広徳館	富山県富山市
㉒	岩村藩	知新館	岐阜県恵那市
㉓	田中藩	日知館	静岡県藤枝市
㉔	桑名藩	立教館	三重県桑名市
㉕	田辺藩	明倫館	京都府舞鶴市
㉖	峰山藩	敬業堂	京都府京丹後市
㉗	紀州藩	学習館	和歌山県和歌山市
㉘	備中松山藩	有終館	岡山県高梁市
㉙	新見藩	思誠館	岡山県新見市
㉚	岡山藩	閑谷学校	岡山県備前市
㉛	福山藩	福山誠之館	広島県福山市
㉜	岩国藩	養老館	山口県岩国市
㉝	高松藩	講道館	香川県高松市
㉞	丸亀藩	明倫館	香川県丸亀市

No.	藩名	藩校名	所在地
㉟	伊予松山藩	明教館	愛媛県松山市
㊱	宇和島藩	明倫館	愛媛県宇和島市
㊲	土佐藩	教授館(致道館)	高知県高知市
㊳	福岡藩	修猷館	福岡県福岡市
㊴	柳河藩	傳習館	福岡県柳川市
㊵	秋月黒田藩	稽古館	福岡県朝倉市
㊶	豊津藩(旧小倉藩)	育徳館(思永館)	福岡県京都郡みやこ町
㊷	佐賀藩	弘道館	佐賀県佐賀市
㊸	佐賀藩多久邑	東原庠舎	佐賀県多久市
㊹	鹿島藩	弘文館	佐賀県鹿島市
㊺	平戸藩	維新館	長崎県平戸市
㊻	熊本藩	時習館	熊本県熊本市
㊼	薩摩藩	造士館	鹿児島県鹿児島市
㊽	吉田藩	時習館	愛知県豊橋市

参加藩校一覧

全国藩校サミット行田大会実行委員会委員

大会役員	石川忠久	漢字文化振興協会会長
大会役員	松平忠昌	忍藩松平家第十六代当主・忍郷友会会長
大会役員	上田清司	埼玉県知事
大会役員	鈴木聖二	埼玉県議会議員
大会役員	工藤正司	行田市長
大会役員	香川宏行	行田市議会議長
大会役員	岸田昌久	行田市教育委員会委員長
大会役員	小川雅以	行田商工会議所会頭
顧問	野中厚	衆議院議員
顧問	小川秀樹	株式会社埼玉新聞社社長
顧問	中村猛	行田市教育委員会教育長
参与	小林一彦	埼玉県利根地域振興センター所長
実行委員長	松平忠昌	忍藩松平家第十六代当主・忍郷友会会長
実行委員長代理	鈴木秀憲	行田商工会議所名誉会頭
副実行委員長	渡邉栄一	忍郷友会副会長
副実行委員長	白石宗靖	漢字文化振興協会事務局長
実行委員	細井保雄	行田商工会議所副会頭
実行委員	矢澤大和	忍郷友会藩校サミット協力委員会委員長
実行委員	清水龍男	行田ケーブルテレビ㈱代表取締役
実行委員	福島伸悦	行田ロータリークラブ会長
実行委員	漆原正人	行田ライオンズクラブ会長
実行委員	倉持成一郎	行田さくらロータリークラブ会長
実行委員	大野哲也	行田青年会議所理事長
実行委員	田代敬二	忍郷友会進脩塾主幹
実行委員	奥田七寿	忍郷友会進脩塾幹事
監事	小山博	忍郷友会事務局長
監事	小林乙三	行田市観光協会事務局長
実行委員	清水威男	忍郷友会事務局
実行委員	清水直人	埼玉県利根地域振興センター地域振興担当部長
実行委員	高橋秀男	行田市郷土博物館館長
実行委員	猪野塚敏和	行田市教育委員会生涯学習部長
実行委員	山本憲作	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	新井啓介	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	五十幡和彦	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	岩﨑安裕	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	碓井勝也	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	遠藤初枝	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	永島健雄	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	大谷純一	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	大澤誠	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	大野年司	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	大谷文孝	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	川田隆生	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	加藤力也	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	粕谷悦昭	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	栗原毬子	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	黒渕陽夫	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	小林晴夫	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	小池俊輔	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	小菅克祥	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	須郷和美	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	鈴木スイ子	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	瀬山文孝	忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員	田島博夫	忍郷友会藩校サミット協力委員

協賛団体・協賛者（敬称略・順不同）

第12回全国藩校サミット行田大会の開催をお祝い申し上げます。

【特別協賛】

埼玉県
行田市
行田商工会議所
公益財団法人　忍郷友会

【団体】

行田金融機関連絡会
行田りそな会
足利銀行行田支店　親足会
行田武蔵野会・むさしのクラブ
埼玉県トラック協会行田支部
行田仏教会
行田ロータリークラブ
行田さくらロータリークラブ
埼玉浮き城プロバスクラブ
公益社団法人行田法人会行田支部
行田ライオンズクラブ
関東信越税理士会行田支部

【企業】

小川工業㈱（行田市）
㈱ファイブイズホーム（行田市）
㈱協同観光バス（行田市）
大野建設㈱（行田市）
小山商事㈱（行田市）

実行委員　中川邦明　忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員　橋本恭一　忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員　早﨑　敬　忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員　松岡由浩　忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員　横川福治　忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員　渡辺幸子　忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員　渡邉久記　忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員　藤倉武　忍郷友会藩校サミット協力委員
実行委員　半田太　忍郷友会藩校サミット協力委員

協力委員　稲永忍　ものつくり大学学長
協力委員　羽田邦弘　埼玉県立進修館高等学校校長
協力委員　野中昭夫　行田市自治会連合会会長
協力委員　小池利昌　行田市商店会連合会会長
協力委員　坂本健次　ＪＡほくさい代表理事組合長
協力委員　佐野哲雄　南河原商工会会長

協力委員　大澤由子　行田市文化団体連合会会長
協力委員　井澤一博　行田市小学校長会会長
協力委員　守屋勝利　行田市中学校長会会長
協力委員　羽鳥英樹　行田市ＰＴＡ連合会会長
協力委員　畠山恒雄　埼玉浮き城プロバスクラブ副会長
協力委員　北島通次　埼玉県企画財政部地域政策課長
協力委員　下田正幸　埼玉県県民生活部広聴広報課長
協力委員　小池要子　埼玉県県民生活部文化振興課長
協力委員　今成貞昭　埼玉県産業労働部観光課長
協力委員　書上元博　埼玉県さきたま史跡の博物館館長
協力委員　羽鳥利明　埼玉県立進修館高等学校同窓会会長
協力委員　永沼規美雄　行田市郷土博物館協議会会長
協力委員　信澤精一　行田市郷土博物館友の会会長
協力委員　小川栄一　（公財）行田市産業・文化・スポーツいきいき財団専務理事
協力委員　鈴木紀三雄　行田市郷土博物館副館長

大和輸送㈱（行田市）
テイ・エス テック㈱（朝霞市）
山本食品工業㈱（行田市）
㈱清水アーネット（行田市）
行田ケーブルテレビ㈱（行田市）
行田自動車教習所（行田市）
渡辺㈱（行田市）
㈾青美矢沢商店（行田市）
㈱ヨコカワ（行田市）
きねや足袋㈱（行田市）
行田中央総合病院（行田市）
㈳クリーンパック（行田市）
㈱ケイマス（行田市）
三共印刷㈱（行田市）
㈱ショーワ（行田市）
壮幸会　行田総合病院（行田市）
大興電子通信㈱（新宿区）
松雲山長光寺（行田市）
㈱パイロットコーポレーション（中央区）
東日本メディコム㈱（行田市）
八木橋百貨店（熊谷市）
㈲羽生モータースクール（羽生市）
湯本内装㈱（行田市）
海野印刷㈲（行田市）
ガクヤ㈱（行田市）
㈱ジム（渋谷区）
㈱十万石ふくさや（行田市）
東旭㈱（行田市）
㈱リノン（行田市）
㈳行田給食センター（行田市）

味工房　那のつ（行田市）
岩崎電気㈱（行田市）
㈲小笠原ラヂエーター工業所（行田市）
割烹 魚豊（行田市）
川野健人事務所（行田市）
㈱サンワックス（行田市）
島崎木材㈱（行田市）
㈱テイク（行田市）
半田歯科医院（行田市）
町田知啓法律事務所（行田市）
山本商事㈱（行田市）
㈲高戸環衛（行田市）
㈲中央百貨店（行田市）
㈱倉持商店（行田市）
㈱小林ビルト（行田市）
㈱シマザキ（行田市）
㈱田島エージェンシー（行田市）
㈱タナカ（行田市）
ベルヴィ アイトピア（行田市）
㈱田村金物（行田市）
前澤瓦工業（行田市）
㈲ムカサ自動車（行田市）
㈲アートクリーン（行田市）
横田酒造㈱（行田市）
㈱碓井測研（行田市）
忍藩堂（行田市）
㈱三八染工場（行田市）
㈲カンダスタジオ（行田市）
㈱鈴木測量設計（行田市）
彰考印刷㈱（上尾市）
NPOぎょうだ足袋蔵ネットワーク（行田市）

㈱武蔵野ユニフォーム（行田市）
㈲白根自動車（行田市）
トーマセンイ㈱（羽生市）
土橋薬局（行田市）
花のアオヤギ（行田市）
凪月堂（行田市）
ホットネット㈱（行田市）
マツオカ印刷㈱（行田市）
松坂屋建材㈱（熊谷市）
三島造園㈲（行田市）
森乳業㈱（行田市）
㈲榧園商事（熊谷市）
セブンイレブン行田向町店（行田市）
㈱メンズオータニ（行田市）
行田ガス㈱（行田市）
酔翁亭　華月（行田市）
大岡産業㈱（行田市）
田代商事㈱（行田市）

【個人】

岩﨑　安裕（小山市）
粕谷　悦昭（宮代町）
山田　映子（行田市）
井上　啓子（行田市）
大西　義道（茨城県）
田中　利幸（行田市）
遠藤　初枝（行田市）
倉田　耕市（静岡県）
柿沼　貴代（行田市）
清水　威男（行田市）
及川　礼子（行田市）

小菅　克祥（行田市）
江草とみ子（行田市）
須郷　　隆（行田市）
小林　晴夫（葛飾町）
八木原　保（渋谷区）
河原　孝子（行田市）
小久保和子（行田市）
川島　　清（行田市）
川田　隆生（熊谷市）
奥田　七寿（行田市）
長谷川盛雄（行田市）
滝田　和夫（渋谷区）
川島　清実（行田市）
水谷　良二（行田市）
小島　成一（羽生市）
斎藤　　恒（行田市）
鈴木スイ子（行田市）
蓮見　牧子（行田市）

第12回
全国藩校サミット®行田大会 記念誌

発行日――平成26年7月5日

発行――第12回全国藩校サミット行田大会実行委員会

［事務局］

行田市教育委員会内　藩校サミット担当

ＴＥＬ　〇四八―五五六―八三一九

ＦＡＸ　〇四八―五五六―〇七七〇

制作・印刷――三共印刷株式会社

「藩校サミット」は一般社団法人 漢字文化振興協会の登録商標です（登録第５６３８５２２号）

協賛広告

花のアオヤギ TEL&FAX 048-555-2311

酔翁亭 華月

トーマセンイ㈱

セブンイレブン行田向町店
TEL.048-554-7011

㈲ 榧 園 商 事

NPOぎょうだ足袋蔵ネットワーク

行 田 ガ ス ㈱

大岡産業株式会社
TEL.048-553-0128

松 坂 屋 建 材 ㈱

HOTNET
PCの困りごと解決します　TEL：048-580-3077

株式会社メンズオータニ
埼玉県行田市長野 4-1-1　☎048-559-1841

且 月 堂

森乳業株式会社
WATABOKU
TEL.048-554-4139(代)

土 橋 薬 局

株式会社武蔵野ユニフォーム
埼玉県行田市藤原町2-7-7　電話：048-554-7325

田 代 商 事 ㈱

三島造園有限会社
TEL.048-556-6653

(有)白根自動車
CITROËN
電話 048-556-2700

チラシ、カタログ、パンフレット、DM、書籍、新聞、伝票、包装紙、屋外サイン・店内POP等
マツオカ印刷株式会社
〒361-0007 埼玉県行田市小見1398-4　TEL 048-553-2323

声楽家・イタリア料理研究家 田中利幸

Belle Vie
AITOPIA
ベルヴィ アイトピア

前澤瓦工業 TEL.048-557-1267 FAX.048-557-1584

(株)碓井測研
☎(048)559-4211(代)

(株)田村金物

車検のコバック®
忍城本丸店

100年の家を守る
技術と真心でパーフェクトクリーン
有限会社 アートクリーン
鴻巣市宮前 84-11 TEL(048)595-1633

横田酒造株式会社
行田市桜町2丁目29番3号 TEL(048)556-6111(代)
http://www.lamoo.co.jp/yokotashuzo/

測量・建設コンサルタント・開発許可・登記申請
株)鈴木測量設計
電話 048(556)7662 FAX 048(556)8929

デジタルグラフィ KANDA STUDIO
撮影・企画・デザイン・制作までお任せください。
有限会社 カンダスタジオ
〒361-0005 行田市斎条1250 TEL.048-557-2759 www.kandast.co.jp

株式会社 三八染工場
TeL 554-0038

彰考印刷㈱

"未来へ翔く"
関東信越税理士会
行田支部

祝　第12回全国藩校サミット行田大会

岩崎　安裕	小松　和弘	小菅　克祥	川島　清
粕谷　悦昭	須郷　隆	小林　晴夫	川田　隆生
加藤　力也	田中　利幸	井上　啓子	河原　孝子
平井ユリ枝	藤間　圭一	大澤　誠	水谷　良二
江草とみ子	倉田　耕市	松岡　由浩	小島　成一
遠藤千枝子	根岸　友憲	田代克太郎	小久保和子
及川　礼子	遠藤　初枝	青柳　憲助	長谷川盛雄
大澤　孝至	清水　威男	杉田　禮三	斎藤　恒
柿沼　貴代	八木原　保	滝田　和夫	鈴木スイ子
山田　映子	大西　義道	奥田　七寿	蓮見　牧子
鹿山　高彦	田代　敬二	川島　清実	

いつの時代も変わる事のない安心をお届けいたします
保険のやまもと
東京海上日動火災保険 代理店 山本商事㈱
行田市旭町10-43 TEL 048-555-2211

祝 全国藩校サミット行田大会
鳶 土工事 家屋解体 外構工事
株式会社 小林ビルト

とんかつ・和食の店
味工房 和のう
TEL.048-555-1450

自然環境と社会環境の融合
株式会社 サンワックス

HANDA DENTAL CLINIC 半田歯科医院

紺織製品製造本舗
力王たび代理店
株式会社 倉持商店

木の文化を後世に伝える
島崎木材株式会社

忍城下平成名所図会・史跡マップ
名所絵はがき(86ヵ所)等、発売中
忍城下七福神巡り連絡事務所
デザイン、販売促進・観光推進企画
忍藩堂 忍藩堂
行田市宮本2-27 ☎048-577-8058

有限会社 高戸環衛
本 社 〒361-0016 埼玉県行田市藤原町3-11-26
TEL：048-554-1920 FAX：048-556-2627
持田営業所 〒361-0056 埼玉県行田市持田3-30-8

町田知啓法律事務所
弁護士 町田知啓
TEL 048(866)4931
埼玉県さいたま市浦和区高砂3丁目17番21号 高砂武蔵ビル502

住宅総合資材販売
株式会社 シマザキ
〒361-0061 埼玉県行田市大字和田 123-3
TEL 048(556)3341 FAX 048(553)3700

LIONS INTERNATIONAL
行田ライオンズクラブ

TOKIO MARINE NICHIDO
東京海上日動火災保険(株)
東京海上日動あんしん生命保険(株)
代理店 株式会社 田島エージェンシー
〒361-0073 埼玉県行田市行田5-10 2F

PILOT
なめらかボールペン
アクロボール

油性ボールペン・アクロボール 150円＋消費税
www.pilot.co.jp

DAiKO
システム構築から
ハード保守まで
一貫したサービスを。
業務ソリューション
セキュリティソリューション
クラウドソリューション
大興電子通信株式会社
〒162-8565 東京都新宿区揚場町 2-1 TEL03-3266-8111(代表) www.daikodenshi.jp

祝 第12回 全国藩校サミット 行田大会
伝えたいを、かたちに。
情報過多のこの時代、
本当に伝えたいことは何ですか？
プランニング デザイン 各種印刷 情報処理
UP
海野印刷有限会社
行田市藤原町 1-25-20 tel. 048-554-0717

SHOWA
歴史とロマンのまちから
世界の舞台へ

四輪用ショックアブソーバ
株式会社ショーワ
埼玉県行田市藤原町1-14-1
http://www.showa1.com

文久二年創業
伝統の味
割烹 魚豊
TEL 048-553-3113

司法書士・土地家屋調査士
川野健人事務所
〒361-0077 行田市忍 2-14-22
TEL：048-552-0152

地域の女性のファッションライフ・生活文化の向上につくす
ファッションサロン
チューオー
おかげさまで
ようこそ!!

販売スタッフ
募集中です
お声掛けください
〒361-0073 埼玉県行田市行田13-6
TEL 048-554-2351 FAX 048-554-7877

暮らしやすい空間・環境を創造する。
建設許可番号 埼玉県知事許可 (特-20) 第 34665 号 一級建築士事務所
TANAKA 株式会社タナカ
〒361-0025 埼玉県行田市埼玉3467
TEL 048-559-4616㈹ FAX 048-559-3064

《昭和14年創業》
有限会社 小笠原ラヂエーター工業所
各種自動車・重機・ラヂエーター販売 修理
〒360-0023 埼玉県熊谷市佐谷田1432
TEL 048-521-3395㈹ FAX 048-521-3384

協同組合 行田給食センター
「安心」と「おいしさ」をお届け致します。
行田市藤原町1-1 TEL.048-556-4561
HP http://www.plus-kun.com/g-kyusyoku/

Take Inc.
ISO 9001 認証取得
照明・音響・映像・特殊効果
総合管理・イベント企画運営
株式会社 テイク
〒330-0834 さいたま市大宮区天沼町1-518
TEL 048-649-7078 FAX 048-649-7079

ひな人形・鯉のぼり

東旭

Tokyoku

蓮の花寺めぐり 第3番　俳人・川島奇北菩提所

千手観音

曹洞宗 松雲山長光寺

〒361-0004　行田市須加4621

TEL.048-557-0999　FAX.048-557-2347

大型　普通　二輪　二種免許　全ての教習が可能です!!

ご都合に合わせた短期集中マイプラン!!

笑顔・あいさつ・キレイ! Smile in HANYU

www.motorschool.co.jp

埼玉県公安委員会指定

HANYU MOTOR SCHOOL

普通・中型／大型・大特・けん引／二輪(普通・大型)／二種(普通・中型・大型)

羽生モータースクール TEL.048-561-3008

埼玉県羽生市砂山80(9:00～20:00 月定休) http://www.motorschool.co.jp

医療業界の発展と

未来にきれいな地球を残したい

東日本メディコム株式会社

埼玉県行田市斎条 128　TEL:048-557-3333　http://www.e-medicom.co.jp

これからも、地域とともに。

熊谷 八木橋

〒360-8502
熊谷市仲町74番地
☎048(523)1111
営業時間 午前10時～午後7時

www.yagihashi.co.jp

YUMOTO GROUP

湯本レストラン株式会社
〒361-0032 埼玉県行田市佐間1456-1
TEL:048(555)2230
FAX:048(553)3739
http://www.yumoto-g.co.jp/

大衆演劇場 行田・もぎく座

湯本天然温泉ホテル

湯本内装株式会社
湯本運送株式会社
〒361-0025 埼玉県行田市埼玉3331
TEL:048(559)4611
FAX:048(559)4666

行田セレモニー会館

家族葬専門 ファミール行田

㈱ヨコカワ　横川福治

本社／埼玉県行田市行田11-33

TEL048-556-2256　http://www.gyoda.cojp

JTB 総合提携店

リノンツーリスト

感動のそばに、いつも。

行田店(ベイシア内)　吹上店(アピタ1F)
深谷店(アリオ1F)　北本店(ダイエー1F)
鴻巣店(エルミ2F)　本庄上里店(ウニクス1F)
太田店(ベイシアおおたモール)

株式会社リノン：埼玉県行田市前谷２５

産業廃棄物処理と再資源化おまかせ下さい
協同組合行田クリーンパック
行田市藤原町1-17-1
☎ 048-554-1462

地球に優しい物流包装
株式会社 ケイマス
★ダンボール、パレット等の
企画、提案、製造、販売★
行田市旭町14−24　TEL 048-569-2251

藩校は教育で、
当院は「仁術」で
人作りに携わります

大殿も健在

スマイル溢れる
生涯医療センター
行田中央総合病院

第12回全国藩校サミット
行田大会の開催を
お慶び申し上げます。
社会医療法人 壮幸会
行田総合病院
TEL 048-552-1111
行田市持田 376

祝 第12回全国藩校サミット行田大会
SANKYO
PRINTING
三共印刷株式会社 TEL. 048-556-6201
本社／〒361-0021 埼玉県行田市富士見町2-1-30 URL●http://www.sankyosya.com
オンデマンド・オフセット・デジタル出力

FASHION CREATORS HOUSE
gim®
co.,ltd.
株式会社　ジム
代表取締役会長
八木原　保
東京都渋谷区神宮前 3−18−20
www.gim.co.jp

菓子文化を見つめる
十万石
行田本店／行田市行田20−15
☎ 0 4 8 （ 5 5 6 ） 1 2 8 5
『うまい、うますぎる十万石まんじゅう』のCMで
埼玉県民の皆様にご愛顧いただいております。
ホームページ 十万石 検索

合資会社 青美矢沢商店
代表社員　矢澤　大和

藩校サミット行田大会にようこそ！

行田市に根ざして創業63年

OKUBO

税理士
法　人 大久保会計

株式会社　大久保経営研究所

行田市消防署前

創業1922年（大正11年）

国産へのこだわり、老舗足袋メーカー

「足袋の行田か、行田の足袋か、」
今では北海道旭川工場が生産拠点

ガクヤ Online shop で購入出来ます。

ガクヤ株式会社

本社（埼玉県行田市向町）　TEL 048-556-3121
営業（埼玉県さいたま市浦和区）　TEL 048-834-7101
http://www.gakuya.co.jp

祝　第12回全国藩校サミット行田大会

ロータリーに
輝きを

行田ロータリークラブ

祝　第12回全国藩校サミット行田大会

Rotary

行田さくらロータリークラブ

PROBUS CLUB
SAITAMA UKISHIRO
JAPAN

豊かな知識と
経験を伝えます

埼玉浮き城プロバスクラブ

【本　部】埼玉県行田市行田1-4
【事務局】羽生市　TEL 048-562-5556

行田仏教会

めざします 企業の繁栄と社会への貢献

公益社団法人 行田法人会

TEL 048-554-4535　FAX 048-554-6969
http://www6.ocn.ne.jp/~gyohojin

酒と米の専門店

リカリッシュ

行田旭町店　熊谷太井店

渡辺株式会社

埼玉県行田市行田1-4
TEL 048-556-3146
http://www.g-watanabe.co.jp/

本　社
縫糸・縫製資材・ファスニング材

グラフィック事業部
広告用マーキングの設計、制作
バス、自販機ラッピング

合宿　通学　ハイスピードプラン

どちらでも 普通1種 AT最短14日 MT最短16日

行田自動車教習所

0120-5151-35　行田市持田2313-5
http://www.taiyo-gyoda.com

地元「行田」の様々なニュースが見られます！

街の情報局　行田ケーブルテレビ

迅速・親切・丁寧サポートのケーブルインターネット「浮き城ZAQ」
使い放題で月額￥2,800（税別）～

行田ケーブルテレビ株式会社　TEL.048-553-2122
行田市持田980番地　http://www.ukishiro.net　「テレビ行田」で検索！　Mail：info@tvg.ne.jp

人にやさしい快適な環境づくりをめざして

SHIMIZ ARNET

産業資材販売
空調衛生設備工事
外柵資材販売施工

株式会社 清水アーネット

行田・熊谷・小山

DAIWA YUSO

大和輸送株式会社

〒 361-0013 埼玉県行田市真名板 131-2
TEL 048-559-3357 FAX 048-559-1645
URL ：http://www.daiwayuso.co.jp

Beyond Comfort
「快適さ」を超えて目指すもの

第43回東京モーターショー 2013
出展品「新世代ミニバンシート」

T-Tech
テイ・エステック株式会社

埼玉工場[行田] 埼玉県行田市野3600番地 〒361-0026
TEL.048-559-1321 FAX.048-559-2700
本社 埼玉県朝霞市栄町3丁目7番27号 〒351-0012
TEL.048-462-1121 FAX.048-465-0403

日本人の食生活はストレスや、偏食から栄養バランスがくずれ、ガンや生活習慣病が増えています。
山本食品は、体を元気にしてくれる機能性食品を研究開発しております。

らっきょう

にんにく

しょうが

kanetamaru

山本食品工業株式会社

行田市埼玉4861-1
TEL 559-2111 FAX 559-0580
URL:http//www.kanetamaru.co.jp

Intertek ISO9001:2008 認証取得

祝　第12回 全国藩校サミット 行田大会

私たち　足銀親足会は
全国藩校サミット行田大会の
成功をお祈りいたします！

足利銀行行田支店　親足会

おかげさまで創業107周年

大野建設株式会社

本社　行田市持田3−4−3　TEL 048−553−0100
ISO9001･14001認証取得　建設省建設大臣顕彰受賞

2000年度認定 環境共生住宅®

大野建設　検索

登録有形文化財（平成17年指定／文化庁）、浮き城のまち景観賞（平成21年指定／行田市）

祝　第12回全国藩校サミット行田大会

行田武蔵野会は、地域社会発展を願い
武蔵野銀行と協力し、日々活躍する企業集団です。
今後も市民の皆様と共に“絆”を大切にし、
行田市発展のため精励して参ります。

行田武蔵野会・むさしのクラブ

〈事務局〉武蔵野銀行行田支店内

埼玉県トラック協会
行　田　支　部

361-0013 埼玉県行田市真名板131-2
(大和輸送㈱内)
TEL　048-559-3357　FAX　048-558-1080

地元に密着した住まいづくり

ファイブイズホーム

http：//www.fiveishome.jp

Tel.048-553-2272（代表）

行田りそな会

行田市商店会連合会

会　長　　小　池　利　昌

〒361-0077 行田市忍 2-1-8　TEL/FAX 048-556-8003

藩校サミット行田大会 協力事業

- 忍城おもてなし甲冑隊・岡崎市：グレート家康公「葵」武将隊・神戸：清盛隊による、歓迎おもてなし事業
- 郷土のソウルフード・B級グルメ・無料試食、試飲会

浮き城のまち行田

わらべたちが遊ぶまち

行田金融機関連絡会

足利銀行行田支店・熊谷商工信用組合行田支店
群馬銀行行田支店・埼玉懸信用金庫行田支店
埼玉りそな銀行行田支店・東和銀行行田支店
武蔵野銀行行田支店

〈五十音順〉

Ogawa
小川工業株式会社
埼玉県行田市桜町 1-5-16　http://www.ogawa-k.co.jp/

株式会社 協同観光バス
観光旅行バス　社員送迎バス
スクールバス　コミュニティバス

埼玉県行田市佐間1-20-36
TEL:048-554-0808(予約)
協同観光バス
Kyodo Bus Group

水城公園

祝　第12回全国藩校サミット行田大会

公益財団法人 忍郷友会

埼玉県立さきたま緑道公園

祝　第12回全国藩校サミット行田大会

行田商工会議所

埼玉県のマスコット「コバトン」

「藩校サミット」は 一般社団法人 漢字文化振興協会の登録商標です（登録第5638522号）